

SGRA REPORT

SGRAレポート No. 99

NO. 99

ISSN 1346-0382

第68回 SGRAフォーラム

夢・希望・嘘

—メディアとジェンダー・セクシュアリティの
関係性を探る—



夢・希望・嘘

—メディアとジェンダー・セクシュアリティの
関係性を探る—

■ フォーラムの趣旨

現代社会に生きる者がメディアの影響からのがれることは難しい。服から食べ物まで、私たちの日常的なあらゆるものの選択はメディアに左右されている。

同様に、子供のころからジェンダーやセクシュアリティに関わる情報にさらされ、女性は、男性は、いかに行動すべきなのか、どのようなジェンダーやセクシュアリティが存在するのか、恋愛とは何なのかというイメージもメディアにより作られている。メディアは意見を作るための貴重なツールであるだけでなく、意見を変えるためのツールでもある。

本フォーラムではメディアはどのように恋愛、ジェンダーやセクシュアリティの理解に影響を与えているのか？ 視聴者やファンはどのようにメディアと接触しているのか？ 社会的な変化のために、メディアをどのように利用することができるのか？ など、現代におけるメディアとジェンダーおよびセクシュアリティの関係性のさまざまな様相を皆さんと共に掘り下げ、探ってゆくことを目指した。

SGRAとは

関口グローバル研究会（Sekiguchi Global Research Association/SGRA）は、良き地球市民（Global Citizen）の実現に貢献することを目標に2000年に設立されました。渥美国際交流財団の所在地、東京都文京区「関口」に因みます。SGRAは日本の大学院で博士号の取得を目指して研究を行い、渥美奨学生として共に過ごした外国人および日本人の研究者が中心となり、現代の課題に立ち向かうための研究や提言を、フォーラムやレポート等を通じて社会に発信しています。幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動が狙いで、多国籍の研究者が広汎な知恵とネットワークを結集し、多面的なデータを用いて分析・考察を行います。

SGRAかわらばん

SGRA フォーラムなどのお知らせと、世界各地からのSGRA会員のエッセイを、毎週木曜日に電子メールで配信しています。SGRAかわらばんは、どなたにも無料で購読いただけます。購読ご希望の方は、ホームページから自動登録できます。

https://www.aisf.or.jp/sgra/entry/registration_form/

夢・希望・嘘

—メディアと
ジェンダー・セクシュアリティの
関係性を探る—



主催 | 渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA)
日時 | 2022年2月20日 (日) 午後2時～5時
方法 | オンライン

総合司会 | モデレーター：デール・ソイヤ (インディペンデントリサーチャー)
開会挨拶 | 今西 淳子 (渥美国際交流財団) 5

【第1部】 [基調講演]
今の時代、白馬に乗った王子様って必要？
—リアリティーテレビの「パチェラー・ジャパン」と
「パチェロレッテ・ジャパン」から見たジェンダー表象— 6
ハンブルトン・アレクサンドラ (津田塾大学)

[質疑応答] 20
質問者：デール・ソイヤ (インディペンデントリサーチャー)
回答者：ハンブルトン・アレクサンドラ (津田塾大学)
Q&Aコーディネーター：郭 立夫 (東京大学)

【第2部】 [発表①]
夢を売り、夢を描く
—ジェンダー視点からみる宝塚歌劇団の経営戦略と関西圏のファン文化— 26
バラニャク平田ズザンナ (お茶の水女子大学)

[発表②]
中国本土のクィア運動におけるメディア利用
—北京紀安德諮詢センターによるメディア・アクティビズムを中心に— 33
于 寧 (国際基督教大学)

[発表③]

#MeTooからデンジャンニョ(味噌女)まで
—韓国メディアにおける「フェミ/嫌フェミ」をめぐって—

42

洪ユン伸 (一橋大学)

【第3部】

ディスカッション

50

パネリスト：ハンブルトン・アレクサンドラ (津田塾大学)
バラニャク平田ズザンナ (お茶の水女子大学)
于寧 (国際基督教大学)
洪ユン伸 (一橋大学)

Q&A コーディネーター：郭立夫 (東京大学)

講師略歴 60

あとがきにかえて

61

デール・ソイヤ (インディペンデントリサーチャー)

開
会
挨
拶

今西淳子 渥美国際交流財団



みなさん、こんにちは。

渥美国際交流財団常務理事、関口グローバル研究会代表を務める今西と申します。

本日はオンラインで開催する第68回SGRAフォーラムに、100名を超える方々にお集りいただき、ありがとうございます。

渥美財団は、博士号を取得するために、日本の関東地方の大学院に在籍して研究を続ける、外国人留学生および日本人学生を支援する奨学財団です。奨学支援が終わった後もずっと連絡をとりあい、一緒にプロジェクトをしようということで、財団設立5年めの2000年7月に、関口グローバル研究会を立ち上げました。今、私が居ます渥美財団事務局のある東京都文京区の関口から、グローバルに発信していこうとして付けた名前です。

今日のイベントも、元渥美奨学生の皆さんがたくさん協力してくださっています。まずは本フォーラムの仕掛け人でモデレーターを務めるソイヤさん、そして報告者のズザンナさん、于寧さん、洪ユン伸さん。皆さん、日本の大学院で博士論文を書いていらした時からのご縁です。于さんは現在も執筆中です。ズザンナさんは残念ながら本日は、ご家族の体調不良のため、録画で発表されます。

ソイヤさんは2012年度の渥美奨学生です。その頃から、ジェンダー研究が増えて、毎年必ず数件の応募があります。そしてソイヤさんの強いイニシアティブで、数年前からSGRAのイベントを毎年開催しています。

ハンブルトン先生には、オンラインながら今回初めてお会いしましたが、ご講演を引き受けてくださりありがとうございます。今日だけで終わらずに、これからもSGRAを応援して下さいますようお願いいたします。

ジェンダー問題は全世界的な大きなうねりとなっていますが、学問としてのジェンダー研究はなかなか難しく、渥美奨学生の選考でも選考委員の先生方が苦勞されています。学問としても社会との繋がりが大切なジャンルであり、今日のようなイベントがとても大切なのではないかと思います。SGRAの中でも、ジェンダー研究は元気なチームですから、今後とも楽しいイベントを開催していきたいと思っています。

皆さん、どうぞよろしくご支援・ご協力をお願い申し上げます。

それでは、「夢・希望・嘘」のお話をよろしく申し上げます。

【第1部】

基調講演



今の時代、白馬に乗った王子様って必要？

—リアリティーテレビの「バチェラー・ジャパン」と「バachelorette・ジャパン」から見たジェンダー表象—

ハンブルトン・アレクサンドラ

津田塾大学

要旨

非正規雇用者の増加、生涯結婚しない人の増加を背景に、結婚して子供を作って安定した生活を送るのが当たり前だと思われていた時代は終わった。ハイスペック男性の心をつかむために若年女性が競いあうという趣旨の番組「バチェラー・ジャパン」が2017年からAmazonプライム・ビデオでスタートした。人気を得て2020年にはハイスペック女性の心をつかむために若年男性が競争する「バachelorette・ジャパン」が配信され、2022年現在では4代目のバチェラーまで制作されている。

「バチェラー・ジャパン」「バachelorette・ジャパン」はともに、人生のパートナーがいなければ幸せではないと強く主張する恋愛至上主義を強調する番組のように見えるが、実は結婚よりも自立を手に入れようとしている参加者が多いということが分かる。この講演では「バチェラー・ジャパン」と「バachelorette・ジャパン」にみる現代日本社会のジェンダー像を考察して、この番組が明らかにする男女の格差、そして貧困の格差について考えていく。

はじめに

本日はお招きいただきまして、誠にありがとうございます。大変光栄です。私も渥美財団ではありませんが、奨学金をもらって日本の大学院を出ましたので、こういう財団はとても大切だと思いますし、感謝しています。

今日は「バチェラー・ジャパン」「バachelorette・ジャパン」という番組を考察しながら、日本の婚活事情について考えていきたいと思っておりますが、最初になぜ私がこういう研究をしたかということから説明したいと思います。

私はもともとアダルトビデオにおけるジェンダー表象について興味を持っていました。女性向きのアダルトビデオと男性向けのアダルトビデオの差異、そしてそのなかのジェンダー表象について研究していたところに、「バチェラー・ジャパン」が配信され始めたのです。試しに見てみたら意外なくらい、アダルトビデオ

におけるジェンダー表象との共通点がたくさんあって、これも研究し始めたら面白いのではないかと思うようになりました。

そのころ私は育児休業中だったのですが、番組のあらすじや感想文を書き始めてみたところ、やっぱりこれは研究してみる価値があると本格的に思うようになりました。

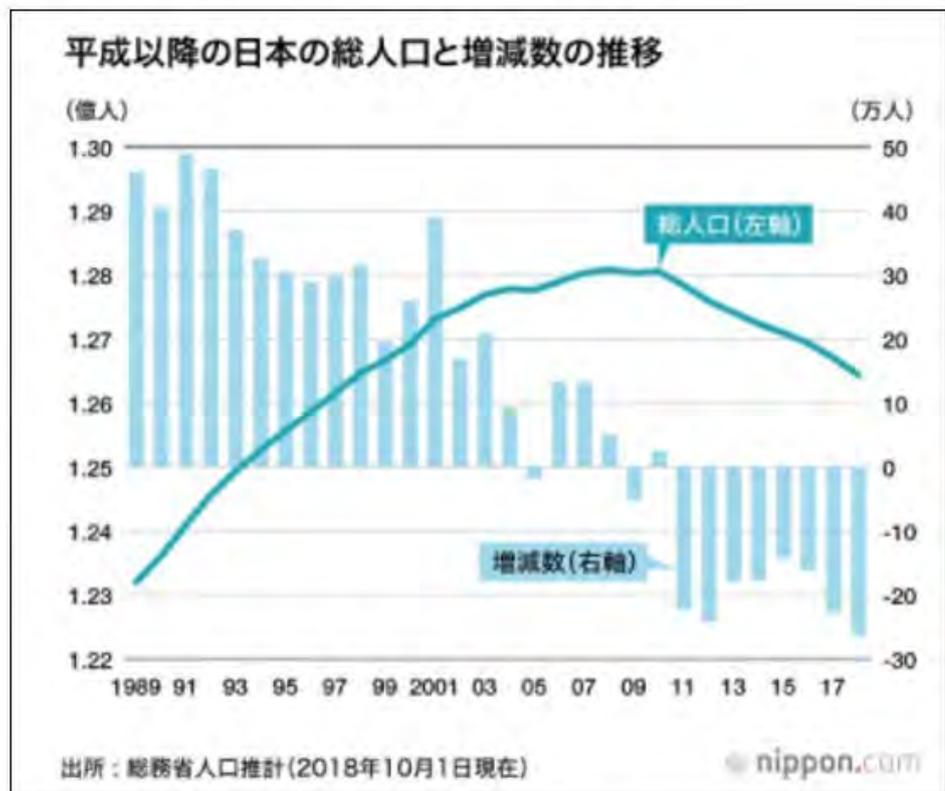
今日は何をお話するかというと、「白馬に乗った王子様って本当に必要？」という少し大げさなタイトルをつけさせていただきましたが、この質問に対する私の考えをご紹介します。

これを考える前提として、まず、現代日本における結婚の状況や、少子化・高齢化問題について説明する必要があります。その次に政府の婚活事業について紹介し、テレビ番組に描かれる理想的な結婚、結婚相手について考えていきます。最後に理想の結婚と現実のギャップについて考察してから、もう一度本題の「白馬に乗った王子様って本当に必要？」という問題に戻って、ちゃんと答えているか確認したいと思います。

1. 現代日本における結婚

まず、日本の変化、人口問題について考えてみましょう。日本の場合、人口は減っています。これは人口が減っているというグラフです（グラフ1）。

2008年にピークの1億2800万人に達したのち、2009年から人口が減り始めま



出典：nippon.com 2019.4.16付記事

Japan Data 「総人口8年連続マイナス：70歳以上が初の2割突破」

グラフ1

結婚 = 出産？ 晩婚化 = 少子化？



出典：厚生労働省『令和2年版厚生労働白書－令和時代の社会保障と働き方を考える』

グラフ 2

した。そして今年で減り続けて11年になります。毎年約0.3～0.5%ぐらいの人口が減っているわけです。戦後の人口増加、高度経済成長期の頃と比べると、日本は人口が増える国から減る国になっています。人口の面からみても、全く違う国になろうとしていることがわかります。

では、人口減少の原因は何でしょうか。それは「子供が生まれないこと」です。人口を維持するには、合計特殊出生率2.1ぐらいが必要なのですが、日本の現代の合計特殊出生率は1.3ですから、全然達していません(グラフ2)。合計特殊出生率が2.1を切ったのは1974年のことですから、少子化というのは最近の話ではなく、問題になってそろそろ50年になろうかという話なのです。

少子化・高齢化・人口減少は、多くの先進国が直面している問題です。ただ、日本は移民の受け入れに消極的で、減少している人口を外国からの移民で補うことを考えていません。今後人口は減る一方、働き手も減る一方、子供も減る一方でしょう。

では、子供が生まれないのはなぜでしょうか。日本の政治家は、子供が生まれない原因は若い人が結婚しないからだによく主張していますが、私はもっと複雑な問題をはらんでいると思っています。

結婚していない親に生まれる子供、いわゆる「婚外子」の割合はフランス＝56%、アメリカ＝50%、私が生まれ育ったオーストラリア＝34%に対して、日本は2.3%とかなり低くなっています(ちなみにOECDのなかで、日本より少ない国は韓国の1.9%)。日本では「結婚」することが子供を産むことのほぼ前提となっているんですね。

しかしここで問題が生じます。平均初婚年齢が年々上がっていて、生涯結婚し

ない人も増えているわけです。

国立社会保障・人口問題研究所の2015年の調査によると、いずれは結婚しようと考えている未婚者の割合は、男性85.7%、女性89.3%です。つまり、多くの未婚者はいつか結婚したいと考えています。しかし、実際には男性の25%（4人に1人）、女性の16%は生涯結婚をしません。また、初婚の平均年齢ですが、第二次世界大戦の直後は、男性は26歳でしたが今は31歳に、女性は22歳が29歳になっています。

1人の女性に生まれる子供の数が減っている。若いうちに結婚しないから、生める数も減っているという政治家もたくさんいるのですが、確実に未婚率が上がっていますし、晩婚化も進んでいます。

結婚・子育て離れが起きていると言ってもいいでしょう。

2. 日本政府の婚活事業

では、この状況の中で、日本政府はどう考えているのでしょうか。それは、できるだけ多くの人にとっても（ととてもとても）結婚してほしいと思っていて、さまざまな政策を導入しているわけです。

私がいろいろ調べてみたなかで一番驚いたのが、最近は自治体のAI婚活マッチングサービスのために政府が支援金を出していることです。AIでマッチングができるのかは怪しいところですが、政府はそれぐらい「結婚してほしい」「結婚すれば子供が増えるだろう」と思っているわけです。こうやってお金を出して、できるだけ多くの人が結婚するようにと事業をやっています。

2017年に東京都知事の小池百合子氏が出席したシンポジウムに参加してきましたが、そのタイトルは「婚活のその先へ」でした。ちょうどその日の朝、上野動物園でパンダが生まれましたので、このニュースを例えに小池氏はパンダと同じく、多くの東京都民に子供が生まれるという喜びを体験してほしいと熱心に語りました。そして、子供がたくさん生まれるように東京都でも婚活イベントを開催しているという話をされていました。

東京都も今はオンラインイベントを多く開催していますし、コロナ禍の前まではパーティーを開いたり、イベントを開催したり、多くの東京都民に結婚相手が見つかるようにと積極的に動いています。若者から中年以上も参加できるように配慮したり、「婚活カフェ」を開いたりするなど、いろいろ開催しています。

また、東京都は「TOKYOふたりSTORY」という素敵なホームページをつくったり、SNSで毎日のようにメッセージを発信しようとしていたりもしています。このホームページのロゴは、字体の異なる「1」と「1」が合わさって「ふたり」の「り」の字を表すしゃれたデザインになっていますし、「多様化する価値観」についても触れていて、昔ながらの結婚をしなくてもいいとアピールしています。

このように、東京都では予算を注いで、多くの都民が結婚するように、取り組んでいるということがわかります。

東京都下の各自治体でも似たような婚活事業をやっていて、例えば東京都港区の例を見てみましょうか。港区は多くの企業が拠点を置いている区で、お金の余

裕がある反面、子育てしている人が少ない区です。港区のなかでも結婚して子育てしてもらえるように、いろいろな推進事業を紹介したりしています。

もちろんこうした取り組みは東京都だけではなく、大阪府も似たような婚活推進事業をしています。たとえば、「結婚・出産・子育て」を全部一緒にして応援するための「ふあみなび」というサイトをつくったりしています。これを見ると、日本の場合は、結婚=出産=子育てと、これら全部を結び付けて考えていることがわかりますね。

政治家の考えでは、多くの人が結婚すれば、子供が生まれてくるだろうということなのですが、もちろんそうではないということは、皆さんわかると思います。「なぜそうではないのか」ということについては、のちほど説明していきたいと思います。

3.リアリティーテレビに描かれる理想的な結婚と結婚相手

婚活イベントに参加してみたけれど成功しなかった、友だちにいろいろ紹介してもらったけどどうまくいかなかった等々、いろいろ試しても結婚相手がなかなか見つからないという人は、ほかにも婚活をする機会があります。それはテレビでの婚活です。

テレビ番組をつかって婚活するなんておかしいと思う人もいるかもしれませんが、リアリティーテレビでは、こういう恋愛ものは非常に人気があります。SNSで発信される人々の感想を見ていくと、多くの若者があこがれている番組だということがわかります。

「バachelor・ジャパン」と「バachelorette・ジャパン」の説明に入る前に、前提としてひとつだけ大切な話をさせていただきます。それは、リアリティーテレビがやらせか真実かという問題です。これはテレビ局、編集者、出演者、関係者以外は誰も答えられませんし、おそらく曖昧な部分もたくさんあると思います。ただ、今日はやらせか真実かという論点は脇においておきたいと考えています。

もちろんこうした問題を意識した上で、メディアを消費したり視聴したりするべきだと、私は思っているのですが、今回のテーマについては、やらせなのかを考えることより、番組に組み込まれたメッセージや価値観について考えたほうが、面白いのではないかと感じています。

2012年に出版された『メディア文化とジェンダーの政治学——第三波フェミニズムの視点から』（世界思想社）という本で著者の田中東子氏は、これまでの多くの研究は、メディアの中の「女性像」が真の姿であるかどうかを検証するものに過ぎないと言っています。それよりも、「女性」「男性」というカテゴリー自体を分析すべきなのではないかと論じています。ですから、今日はそういう観点から、バachelor／バacheloretteの話に入りたいと思います。

まず、バachelorとは何なのかを考えていきましょう。バachelorは2002年に初めてアメリカで放送されたリアリティーテレビ番組です。今まで30か国で制作され、225か国で放送されてきた大人気リアリティーテレビ番組です。今は

テレビで婚活？



出典：「パチェラー・ジャパン」シーズン4 (C) 2021 Warner Bros. International Television Production Limited

図1

リアリティーテレビの黄金時代と言われていますが、当時（2000年代の初め）はまだまだ珍しいフォーマットで、似たような番組はあまりありませんでした。

ご存じの方も多いかもかもしれませんが、念のため番組の流れを簡単に説明したいと思います。

流れとしてはハイスペック男性「ザ・バチェラー」が結婚相手を探しています。充実した仕事があって、趣味もあり、友達もいる。お金ももちろんある。唯一足りないのは彼女だけだというんですね。

プロデューサーが20人の女性を集め、バチェラーが女性たちとデートを繰り返して、一話ごとに開催される「ローズセレモニー」で興味のある女性にバラを渡します。バラを貰えない女性は脱落し、最終的に二人の女性が残ります。最後のローズセレモニーでバチェラーが1人の女性に最後のバラを渡して、愛を告白します。場合によってはプロポーズもします。

バチェロレッテは男女が逆になります。ハイスペック女性（これは超美人なのか、お金持ちなのか疑問が残りますが、あとで考察します）が、20人の男性とデートを繰り返して、最終的に1人の男性に告白します。

国によってバチェラーのフォーマットは少し変わります。例えばアメリカの場合、最後に残る3人の女性と一人ずつホテルでお泊りデートする機会がバチェラーに与えられたりしますが、大筋のストーリーは各国で大きくは変わりません。

バチェラー／バチェロレッテとは何かを理解したところで、日本のバチェラー／バチェロレッテに描かれる男女、そして結婚の表象について考えていきたいと思います（図1）。

日本の場合は、アメリカの放送開始から15年経った2017年に、地上波による放送ではなく、Amazonプライム・ビデオとして配信されました。「全世界で熱狂中」「台本のないラブストーリー」としてアピールしていました。

日本の記念すべき第一号のバチェラーはどんな人だったのか。以下は彼の紹介

シーンです。海を眺めながら深く考える様子、スポーツカーでドライブを楽しむ様子、格好良く会社の廊下を歩く様子、英語で会議に参加する様子、海岸でシャワーを浴びる様子、子供の頃の幸せな思い出を語る様子、そして最後に格好いいスーツ姿で「結婚相手に出会う心の準備ができています」と少し不安そうに語る様子。日本初代バチェラーのHK氏（番組では実名で登場。以下同）のこうしたシーンが、日本の視聴者にモニタージュ形式で紹介されました。

HK氏はいわゆる「3高」男性です。高身長、高学歴、そしてもちろん高収入です。現代日本女性にとって最高の結婚相手だといってもいいでしょう。番組内でも「セレブでイケメン。そしてもちろん、独身」と紹介されました（性格については触れません）。

35歳の起業家で、東京大学の大学院も卒業しています。友達が沢山いて、仕事もとても充実しており、楽しく暮らしているとカメラに語ります。しかし、楽しい毎日と一緒に過ごす相手がいないのでバチェラーに出演することに決めましたと話しています。

では、プロデューサーがHK氏のために用意した女性はどういう人だったかをみてみましょう。最初に登場したのは26歳のフードコーディネーター、次は23歳のタレント、次は21歳の着物着付け師。22歳の大学生もいました。

この女性たちの共通点は何でしょうか。次から次へ若い女性が登場しますが、そのほとんどが不安定な職に就いている女性です。フリーランスか非正規雇用者、もしくは大学生で職に就いていない人たちです。なかでも、一番驚いたのは20歳のギャル「ゆきぼよ」です。ゆきぼよの仕事は「カリスマ動画クイーン」と紹介されました。ゆきぼよが登場したとき、HK氏は驚きを隠すことができませんでした。

10話のエピソードの中で、バチェラーのHK氏はデートを繰り返したり、最後に残った3名の女性の家族に会ったり、最後の2名に自分の家族を紹介したりします。そして最後に選んだのは、22歳の大学生でした。35歳のバチェラー（企業家・お金持ち）と22歳の大学生が一緒になるわけですね。非常にアンバランスな力関係になっています。

その後の2代目、3代目、そして4代目のバチェラーも非常に似ています。2代目のRK氏が37歳、3代目のST氏が34歳、4代目のKK氏が35歳。全員が30代で、全員がお金持ちです。全員カメラの前で自信満々に語っています。そして、全員に提供された女性のほとんどが20代で、不安定な職に就いています。

番組を見ているこちらが心配になるほど、明らかな権力のアンバランスさがあるのです。

4.リアリティーテレビに描かれる現代の理想的な男女と現実のギャップ

なぜ若い女性は「バチェラー・ジャパン」に出演しようとするのでしょうか。番組に出演することによって理想的な男性と結婚できるかもしれないと考えからでしょうか。バチェラーは全員理想的な男性に見えます。セレブでイケメン。そしてもちろん、独身です。

「バachelor・ジャパン」に応募する女性の数は数百人以上だそうです。1000人を超える時もあるといます。彼女たちの目的は、恋人に出会うため？ 理想的な結婚相手に出会うため？ お金持ちの男性と結婚するため？ 私は、「自分たちの人生を違う方法で変えるため」という理由もあると思っています。

1986年に男女雇用機会均等法が導入される前、女性は男性と同じように働くことができませんでした。簡単にいうと、男性と同じように正社員になって、経済的な自立のために働くことは非常に難しいことでした。この法律についてはいろいろな研究者が分析していますが、ベラ・マッキー（Vera Mackie）先生の研究によると、男女雇用機会均等法の導入前は「女性はいつか結婚していつか妊娠するから、そのために体を守らないといけないので正社員として働くのはよくないのではないか」という概念から同じように働かせてくれなかったのではないかと論じています。女性はいつか母になるからと思われることが、女性の自立を阻んでいたわけですね。

でも、男女雇用機会均等法が導入されて、35年が経ちましたが、状況が変わったかというと変わっていないかもしれません。今も女性が安定した収入、経済的な自立を手に入れることは非常に難しいのではないかと多くの研究者が論じています。この新型コロナのパンデミックのなかで、状況はさらに難しくなったかもしれません。

経済的な自立を手に入れるための方法はいろいろ考えられますが、昔ながらの「安定した収入のある人と結婚」することも選択肢の一つです。

データを見てみると、日本人女性の70%は「結婚相手の収入が400万円以上必要」と考えています。しかし、未婚男性の約30%しかこの条件を満たしていません。非正規雇用者も年々増えています。非正規雇用者の未婚率は正規雇用者よりあきらかに高いんですね（図2）。

簡単に「正社員じゃないので結婚できない」という問題ではありませんが、収入と結婚には関係があると言えるでしょう。安定した職と結婚も関係しています。

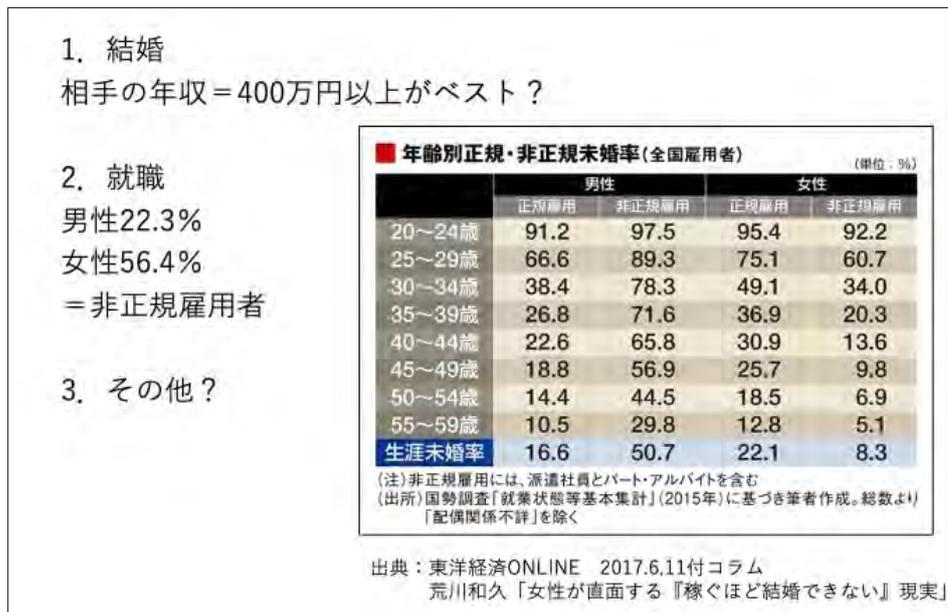


図2

日本は30年以上平均収入が上がっていません。OECDの中で最も少なくなっています。去年までは韓国が日本よりも少なかったのですが、今年に入ってから日本の平均収入は韓国より少なくなりました。こうした経済状況の中で、結婚すれば経済的に安心できるという考え方は、もう古いのではないかといえるでしょう。

経済的に自立するためのもう一つの選択肢は、自分で稼げるようにすることです。しかし、ここでまた非正規雇用者の問題が出てくるわけです。割合を見てみると、女性のほうが圧倒的に多いのです。現代日本の就職状況は、女性にとっては先ほど説明したように非常に難しいことになっています。

では、経済的に安心できるようにするもう一つの方法はないのでしょうか。それはバチエラーに出ている女性のように、自分を商品化することです。

ガブリエラ・ルカクス (Gabriella Lukács) 氏が2020年に刊行した『Invisibility by Design』という本によると、現代日本社会では女性がデジタルエコノミーの中で自分を商品化しようとして、貧困から脱出しようとしている。写真家、プログラマー、ネットアイドルなどとして成功するには情緒的な労働が必要で、消費者や視聴者に温かい気持ちを抱いてもらうことが肝要だと論じています。

先ほど説明したように、バチエラーに出演している女性の多くはフリーランス、または非正規雇用者です。

もちろんバチエラーに出る理由として、ハイスpek男性と結婚するのが目的だという人もたくさんいると思いますが、それよりも出演することによってキャリアアップ (タレントとして、フリーランスとして) することを望んでいる人も多いのではないかと思います。

つまり、「全く新しい形のフェアリーテイルを形成しようとしている」ということです。そのフェアリーテイルは「頑張れば有名になれるかもしれない」「頑張れば貧困・プレカリティ・不安な生活から脱出することができるかもしれない」というおとぎ話です。バチエラーという「台本のないラブストーリー」は、ラブストーリーではなく、全く違うフェアリーテイルになっていると思います。

そうはいつても、成功するのは非常に難しいことです。バチエラーに出演する女性は常に葛藤しています。キャリアのためではない、恋に落ちるために出演していると見せかけないといけない。キャリアのためだと思われたら、その瞬間にアウトです。

バチエラーにはもちろん嫌われますし、視聴者にもブーイングされ、批判されます。その後のキャリアにも影響が出てしまいます。出演する女性は「愛を探している女性」を、視聴者の心に響くように演技しないといけないわけです (*chat) 1。上手に演技すれば、バチエラーからバラをもらうことはできないかもしれないけれど、その後キャリアのための機会はたくさん与えられるかもしれません。でもこれは非常に難しい演技です。

画面にたくさん登場するためには、つまらない人だと思われてはだめです。面白い人になって、編集者やプロデューサーに愛され、できるだけ登場場面を多くしてもらい、視聴者に愛されるように。そして最後までバチエラーに捨てられないように愛さ

1 参加者 chat ①:「視聴者」の役割に触れましたが、2つの番組の視聴者の特徴はあるのでしょうか？ (男女、未婚・既婚、年齢など) そもそもこれらの番組の魅力は何でしょうか？

れないといけない。とてもとても難しい感情労働をしないとけないわけです。

これが、「バチェラー・ジャパン」のジェンダーダイナミクスです。次に「バachelorette・ジャパン」を考えたいと思います。

バacheloretteはバチェラーの逆バージョンで、ハイスペック女性が結婚相手を探す番組です。では、ハイスペック女性とはどんな女性でしょうか？そこを考えてみないとけません。

2020年に日本初のバachelorette、MF氏が登場しました。バチェラーを見てきた視聴者はハイスペック（セレブ、美人。そしてもちろん独身）を期待していたかもしれませんが、番組はMF氏の経済事情に直接触れることは一切ありませんでした。美人で、スタイルがいい、アドベンチャーが好き、仕事は「スポーツトラベラー」という曖昧な説明しかなくて、バチェラーとは全く違う扱いになっていたのです。出演していた男性もまたバチェラーに出ていた女性たちとは違います。非正規雇用者・フリーランスは少なく、多くの男性は「MF氏に尊敬される」と思われている仕事に就いているか、お金持ちの男性でした。

番組の中で常に感情労働をしているのは、候補者の男性たちではなく、バacheloretteのMF氏です。番組のリーダー＝主人公として働きながら、男性たち、そして視聴者に好印象を与えるために「愛を探している孤独な女性」を演技することが求められていたのは明らかです。女性は主人公になったとしても、番組の空気を支配することは望ましくないとされているという印象を受けました。男女の役割、男女の在り方、ジェンダー観念がまだまだ強く根付いているように感じました。

バacheloretteで一番印象に残ったのは、最後のローズセレモニーです。MF氏は残った男性二人を選ばず、一人で帰りました。候補者の一人はお金持ち、一人は画家でお金はないけれど夢のある人物でしたが、MF氏は運命の人には出会っていないと帰るのです。選ばれなかった二人の男性は、悲しそうに森に帰っていくという演出がされ、ハッピーエンドにはなりません。

では、女性を選ぶ選択をしたバチェラーたちのほうは、その後どうなったのでしょうか。初代も二代目もその後に破局しています。三代目は最後に選んだ女性と別れて、二番だった女性と去年結婚しました。四代目のバチェラーはまだ最後に選んだ女性と付き合っているようです。

私は、バチェラー／バacheloretteに登場してきた人の中で、最も成功したのは「真実の愛を手に入れたカップル」ではなくて、「キャリアを手に入れたゆきぼよ」なのではないかと思っています（※chat）2。

2 参加者 chat ②：「本当の勝者はゆきぼよ」というコメント、とても共感しました。バチェラー4の休井美郷さんも芸能界入りしたようで、これから売れるのでは！と思っております。一方で「戦略」がありそうで結果的に炎上してしまったような人もいます。これまでのバチェラーで一番、先生が興味を持ったキャラクターの女性は誰でしょうか！？

参加者 chat ③：リアリティー番組では若者向けの「今日好きになりました」や「オオカミ君には騙されない」「恋する週末ホームステイ」（いずれもAbemaTV）などがあり、バチェラーやバachelorette同様に出演者が知名度を上げてゆきぼよのように活動の場を広げることが増えているので、リアリティー番組がシンデレラストーリーのためのツールになっているのかなと思いました。

カリスマ動画クイーンとして紹介された20歳のゆきぼよはバachelorにこそ選ばれませんでした。視聴者にはとても好かれました。バラエティー番組、トークショー、そしてアメリカで放送された「Bachelor Winter Games」と「Bachelor in Paradise」シリーズに出演して大人気となり、2020年にはテレビ出演本数200本以上という超売れっ子になっています。

ただ、それは一時的な勝利だったようです。私は最近まで、ゆきぼよは非常に難しいことを成し遂げ、不安定なフリーランス生活から、条件のいい仕事に就くことができた成功者だ……と思っていたのですが、現在はスキャンダル騒動を受けて仕事の多くがキャンセルになっているようです。これからのキャリアはまた不安定なものになってしまうでしょう。

価値観の多様性・多様化の兆し

最後の結論に入る前に、政府の婚活事業と「バachelor／バachelorette・ジャパン」の共通点について少し考えたいと思います。

両方とも「恋愛至上主義」の例になっていることです。恋に落ちたいと思うのは当然、人間はみんな結婚相手を見つけたいと思っている、結婚したくない人はおかしいんじゃないかという風潮もあるように思います。男女が結婚するのは当たり前という雰囲気なんですね。結婚するまで大人になれない、幼い、甘い、無責任という一般論もあります。これらはすべて固定概念です。

男性は稼ぐ、男性は大黒柱、男性はリーダー。そして女性は家事・育児を多く負担して、バランスをとらないといけない。女性は感情労働をしないといけない、女性は結婚のために自分の何かを犠牲にしなければいけないという雰囲気は、婚活事業のなかにもあるし、バachelorシリーズのなかにもあると思います。

図3を見てください。左の画像は東京都の婚活情報サイト「TOKYOふたりSTORY by 東京都」が運営するツイッターですが、バランスを考えているのは



図3

女性です。右の画像は私が10年前に撮影した電車内の吊り広告ですが、10年前でも結婚か仕事かで悩んでいるのはやはり女性です。結婚か仕事かで悩む男性がいたとしても、テレビではほとんど紹介されないし、婚活推進事業のなかでもあまり反映されていないようです。

「パチェラー／パチェロレッテ・ジャパン」のなかで描かれるのは、一見、固定概念に基づいたラブストーリーのように見えます。男女の役割は決まっています、視聴者に許される行動しかとれません。新しい形の恋愛も描かれません。しかし、もっと深く掘り下げると、その固定概念を静かに覆そうとしている女性がたくさん出演していることがわかります。恋愛よりも経済的に自立する、キャリアを追及している女性たちです。初代パチェロレッテのMF氏は自分を犠牲にしたくなかったから、最後は誰も選びませんでした。

これは経済的な事情によって、日本人の価値観が変わってきているという事かもしれないと私は思っています。価値観や考え方を変えないといけない、固定概念から脱出しないといけないという考え方よりも、経済的に不安定になっているから社会進出を果たそうとしている人がたくさんいるのではないかと思います。

ここまで見てきて国の婚活事業の話を振り返ってみると、もう少し経済的な事情を配慮しておいたほうがうまくいくのではないかと思います。東京都は、婚活のホームページに結婚に対する価値観も多様化してきたと書いているのですが、これは事実なのでしょうか。私は疑問に思います。

東京都が挙げている成功している夫婦の例を見てみると（図4）、「結婚すれば家



図 4

族が生まれてくる」というのは単なる思い込みだということがわかります。子どもはいないかいても一人、多くても二人。もしくは夫婦二人だけのペアも多いわけです。結婚すれば子どもがたくさん生まれてくるという考えは当てはまりません。

多様化している要因は、共働きが増えたことが大きいと思います。つまり、多様化の裏には経済状況があるということです。経済状況が難しいので共働きをしないとやっていけないという事情が、昔ながらの男女の役割を覆しつつあるのだと思います。

結論に入る前にパチェラー／パチェロレッテの中で多様化が反映されている例を、一つ挙げたいと思います。それは去年オーストラリアで放送されたパチェロレッテです。彼女は番組では世界初のバイセクシャルパチェロレッテ、Brooke Blurtonでした。バイセクシャルというだけではなく、バックグラウンドも先住民、つまりオーストラリアンアボリジニです。プロデューサーは彼女のために20人の男女を用意しました。男女の中から相手を選ぶのです。彼女は自分のアボリジニという文化を紹介しながらパチェロレッテとして出演しました。10年前のオーストラリアだったら想像もできないことです。少しずつ社会が多様化していることが反映されていると思いました。

リアリティーテレビは現実からかけ離れているかもしれませんが、社会の新しい風習・考え方・価値観が反映されていたり、あるいはそれを巻き起こしていたりする場合もたまにはあります。

日本でも少し変わってきているんじゃないかと思わせてくれる例もありました。「パチェラー・ジャパン」の中でも少し多様化が見えてきます。

それは4代目パチェラーのKK氏が出演したことでした。彼は初代パチェロレッテのMF氏にふられて森の中に去っていった男性で、中国の出身です。

長年日本のテレビを研究してきた私にとって、こうやってパチェラーつまり、恋愛対象の主人公として、中国出身の男性を選ぶのはかなり画期的なことだと思いました。ふだんは移民として、あるいは労働者、あるいは学生としてしか描かれない海外出身者が、言い方は悪いのですが、ふつうの人間としてパチェラーに出演していたからです。

パチェロレッテと一緒に出演していて彼と仲良くしていた人のなかにも、イタリア系日本人の父とブラジル人の母に生まれたという背景を持つRT氏という男性がいました。こういうバックグラウンドを持つ二人が友達になって、日本語で話したり、飲んだりするシーンが配信されていたのも印象に残っています。

日本は移民に対して消極的かもしれませんが、移民がだんだん移民としてではなくて、ふつうの人としてテレビに登場するようになったということは、やはり日本も少しずつ変わってきているように思いました。

おわりに

結論として、本日の講演タイトル「今の時代、白馬に乗った王子様って必要？」に戻りたいと思います。

私は、ある意味必要かな？ と思っています。でもそれは結婚相手としてでは

ありません。経済的困難に陥っている女性が多いわけですが、それは男性も同じです。ですから、結婚相手としての王子様ではなくて、日本の経済をよくしてくれる王子様だったら、皆さんの救いになるんじゃないかと思います。

結婚相手が見つからない、出会いの場がないから結婚したくてもできないも多いと思いますが、経済的な理由で結婚、子育てできない人もとても多いでしょう。

つまり、本当に求められている白馬にのった王子様とは、非正規雇用制度の改善、最低賃金の引上げ、福祉社会の充実を真面目に取り入れる政権、政治家ではないでしょうか。

これで私の講演を終わります。ご清聴ありがとうございました。

【第1部】 質疑応答

質問者：デール・ソイヤ（インディペンデントリサーチャー）

回答者：ハンブルトン・アレクサンドラ（津田塾大学）

Q&A コーディネーター：郭 立夫（東京大学）



デール chat: パチェラーを見た人はいますか？

参加者 chat ①: シリーズ1・2・4とパチェロレットは見ました！

参加者 chat ②: パチェラー全シリーズ、パチェロレットも見ました！

デール chat: すごい！よかったら感想を教えてください！

参加者 chat ③: 本編とはずれるのですが、シリーズ4放送後の候補女性の発表がショッキングで印象的でした……。

デール: とても明確に現在社会とメディアの関係性について発表してくださってありがとうございます。皆さん熱心に内容を聞いてくださったと思います。聴講されている皆さん、よろしければ質問をたくさんお寄せください。

では、最初に私からの質問ですが、「ザ・パチェラー」のシーズン1はアメリカでは2002年ですから、もう20年前からありますよね。日本では、最初のパチェラーもかなり最近になってから登場していますよね。

ハンブルトン: リアリティテレビが入り始めたころから、日本でも民放各局がいろいろ試したみたいなのですが、結構失敗した例が多いみたいですね。ネットで配信されるようになって、だんだん成功するようになってきたということだと思います。

デール: 私の質問は、日本のパチェラーがなぜ「今」なのか。今のタイミングなのかということなのですが、やはり配信の事情によるのでしょうか。

ハンブルトン: 配信サービスによって海外のものを見る機会が増えたことが大きいと思います。海外と似たようなフォーマットのものが受け入れやすくなってきている部分があるのではないかと思います。でも、「サバイバー」の例のように大失敗したものもありますからね。

参加者 chat ④：日本版のバチェラーおよびバチェロレッテしか見ていないのですが、他国の同シリーズでも、選ぶ側と選ばれる側の不均衡は同じくあるのでしょうか？

参加者 chat ⑤：アメリカへのシリーズと日本のシリーズを比較したとき、ジェンダーに対する役割に差があるのか気になります！

デール：日本にも「サバイバー」があったのですか？

ハンブルトン：1回あってすごく失敗しました。ですから、多分、海外のものに触れる機会が多くなってきて、だんだんと受け入れやすくなっていったのだと思いますが、それは Amazon で働いている人にぜひ聞いてみたいなと思っています。

デール：そうですね。全シリーズを見ている人もいるので。私はまだ感想を読む時間はないのですけれども。

ハンブルトン：他国のバチェラーの事情もぜひぜひ。

デール：そうですね。アメリカの方は、またはオーストラリアの方も最後の方にバイセクシュアルの女性の話聞いたのですが、例えばヘテロセクシュアルのバチェラーやバチェロレッテの場合は日本と同じ感じで、ちょっと年上の男性と若い女性というのがまだ一般的なのでしょうか。

ハンブルトン：いえ、結構さまざまですね。アメリカの場合は、例えば女性で医師が出てきて（医師なのになぜそんなに長く休めるのかは分からないのですが）、彼女が結婚相手を探しているとか、パイロットとか。女性もある意味キャリア的にハイスペックな人はいるのですが、最初の方はそうではなかったですね。最初の方はやはりお金持ちの男性と、という感じでしたね。

デール：では、今の日本のバチェロレッテはどちらかというとなアメリカの最初のころに似ていますか？

ハンブルトン：似ているところが多いと思いますが、先ほど講演でお話したように、四代目の KK 氏がバチェラーとして出てきたころから、ちょっと変わってきていると思うようになりました。

デール：そのお話はとても面白いと思いました。ハンブルトン先生が言ったように、人間として扱う。何か外国人は……。

ハンブルトン：移民とか、留学生という扱いではなくて。

デール：そうですね。それも新しいですね。こういうリアリティ番組のおかげで外国人も人間になる。

ハンブルトン：人間になる。人間になるという夢を多分みんな持っていると思いますけど。

デール：そうですね。あと、話を聞いてすごく印象的だったのは、バチェロレッ

参加者 chat ⑥：パチエロレットは座談会での脱落した男性同士のホモソーシャルなのりがきつく、女性を悪者に仕立てるようなバラエティに仕立てられていてなんだかなあ……誰も選ばなくて正解だったのかも……と思ってしまいました。

参加者 chat ⑦：パチエロレットの男性陣のホモソーシャル感キツかったですね（涙）。

参加者 chat ⑧：ホモソーシャルなノリの具体例興味あります。

テが最後は誰も選ばなかったということなのです。それもすごくいろいろな社会的な意味が読めます。女性の幸せは何かという。

ハンブルトン：本当にそう。入れるかどうか悩んだけど、70年代のウーマンリブの活動家がよく「お母さん、本当に幸せですか」というようなバナーを持って、デモに挑んでいた人もたくさんいたのですが、本当に似たようなことなのです。結婚は本当の幸せなのかなと問い直してやるような感じですね。

デール：それはどう見られたのですか。例えばメディアやオンラインのファンなどでは誰も選ばなかったことに関して、それは良い選択肢だったのか、またはそれを批判した人が多かったのか。

ハンブルトン：両方です。彼女に提供された男性が駄目だったから当然でしょうというふうに思っている人もいたし、「何でそんなわがままなことをやったの」「視聴者はみんな期待していたのに、なんだよ」みたいなバッシングもあったので。確かに提供された男性はどうかという人が多かったのです。

デール：ここで、Q&A 担当の郭立夫さんをお呼びしたいのですが。郭さん、いますか。何か面白い質問はありましたか？

郭：はい。私がすごく気になっていたところが、皆さんとも結構重なってまして、似たような質問が多く寄せられています。

「パチエラ・ジャパン」の中では男性同士の間のホモソーシャル的な側面が描かれているのですよね。私はセクシュアルマイノリティなので、異性愛の恋愛番組をセクシュアルマイノリティの観点から見るとなかなか興味深いのです。「ああ、こういうものなのだ」みたいな感覚があります。異性愛の人たちから見ればごく普通のことなのだと思いますが、こちらから見ると異世界を見ているようなきついものがよく描かれているように思います。男性同士だったり、女性同士だったりのシスターフッドもステレオタイプの描かれているというような、やはり同性間の関係を争いに近い描き方をしているのですね。その点については、ハンブルトン先生はどう考えていらっしゃるのでしょうか。

ハンブルトン：すごく良い質問で、もっともっと研究したいところなのです。よくあるのが、男性同士が仲良くしている、女性同士が争っているということなのです。ただ、撮影しているときは、たくさんお酒を飲ませて、ご飯をあまり与えないで夜遅くまで撮影を続けて、みんな疲れて精神的にも追い込まれている状況の中で撮影していることが多いのです。だから、その中ではみんなのベストが現れているわけではないのです。人間としてのあまり良くないところがたくさん現れるような状況になるわけなのです。でも、多分プロデューサーも争っているよりも仲良くしている姿の方が視聴者の心に響くということに、ようやく気付いてきていると思うので、仲良くしている、友だちになっている、協力し合っている

る、応援し合っている姿の方が最近も多く番組に入れられています。

でも、本当に男性同士の友情で許されるもの、許されないものももちろんあるし、女性同士の友情の中でもそういうことがあるので、もっともっとこれから研究したいなと思っています。ちなみに、オーストラリアのバチェラーで一緒に出演していた女性も女性同士カップルになって幸せになったところもあるので、本当にああいう過酷な状況の中で撮影をしている人たちもどういうふうに自分を演出する、どういうふうに友情を演じるかということもすごく面白いところなので、今後その研究をまたやっていきたいと思っています。

郭：ありがとうございます。単純にこの番組は、文化的なプロダクトとして見ているときに、それを消費するときにどう読めばいいのか、読み解くのがいいのかということもすごく面白くて、例えば男性同士のホモソーシャルなところをもう少し譜読みの読み方をするのも可能だと思うのです。そういう読みの可能性は出てくるのではないかとこのころはやはり興味深い話なので、今日は時間があまりないのでまた機会があればぜひ話を聞きたいと思います。

もう一つ、質問を取り上げてもいいでしょうか。

デール：どうぞ。

郭：頂いた質問の中でもう一つ重なっていたのが、やはり人種の話なのです。コメントのような感じになりますが、読み上げます。「日本にいる多くの移民は東南アジア出身だと思うので、そういう実態を比較すると日本メディアのwhite supremacy 助長には相変わらず疑問しかありません」
というものです。そこで私が考えていたのは、例えばハンブルトン先生が最後に提起していただいたKK氏の話です。

KK氏がなぜここに出てきたのかという話を考えると、中国のイメージの変化というのが大きいと思うのです。貧乏な国から金持ちみたいなイメージになっていて、そこが安全範囲、例えばマスキュリニティの安全範囲の中のちょっとした逸脱を入れて、そこで多様性を示そうとしているのではないかと私は考えているのです。特に日本は結婚制度、夫婦別姓制度も同じですが、戸籍制度と絡んでいて、人種差別的な制度なので、その現実とアメリカから来た番組の多様性の表現の仕方の間のギャップをどう考えていらっしゃるのか。

ハンブルトン：それもすごく面白い質問です。KK氏はお金持ちだから許されるということはすごくあると思います。ただ、彼自身がバチェラーになったときにも、最後に残った3名の女性の家族に会ったとき、家族に「娘さんが私みたいな外国人と結婚したら許してくれますか」みたいな質問をするのです。すごく自分が外国人だということを常に意識した上で行動を取らないといけないような感じで動いているわけです。お金があるから許されるのではなく、本当に娘が僕みたいな人と一緒になっても大丈夫なのと常に確認しているわけです。

でも、やはり中国のイメージが、先ほど郭さんがおっしゃったようにお金持ち

参加者 chat ⑨：日本にいる多くの移民は東南アジア出身だと思うので、そういう実態を比較すると日本メディアのwhite supremacy 助長には相変わらず疑問しかありません。

参加者 chat ⑩：そのギャップを埋める動きがなければ、結婚率が上がりにくいかも知れません。

がたくさんいる国に変わってきているのですが、まだまだ Amazon プライム・ビデオのこのシリーズの口コミを見ると、ひどいコメントがたくさん、右翼的なコメント、右翼団体が殺到してコメントを載せているので、あまり見ない方がいいと思います。私も1回だけ見て、脱落してやめたのです。

郭：すごく想像できます。

ハンブルトン：すぐ想像できるでしょう。うおーっと思うようなコメントばかりで。でも、おっしゃったように、外国人イコール白人というイメージがまだまだ日本のマスメディアの中でも強くて、政府の中でもそうになっているわけです。区役所に行くと「外国人が住みやすい〇〇区に」みたいなビラなどを見ると必ず白人が載っているし、東南アジアの人が完全に見逃されているような感じもまだまだあるので、また人間として東南アジア出身の人が日本のテレビに登場し始めたらやっぱり変わってきたねと思えるようになってくるのでしょうか。まだまだ問題はたくさんあります。Amazon のコメントはぜひ見ないように、皆さん、心掛けて、避けてください。

デーラ：ありがとうございます。Amazon はそういう感じのコメントなどは管理しているのですか。

ハンブルトン：していないと思います。ある程度はしているのはしているのでしょうけれども、結構長く同じものが載っているものもあるので、あまり。嫌なところが見えてくるだけです。

デーラ：気になったのですが、番組を見ているのは、だいたいどのような人たちなのか。それに関してのデータなどはありますか。

ハンブルトン：まだ手に入っていないのです。ただ、学部生に聞いてみると結構見ている人が多くて、若い女性が多いのではないかと思います。

デーラ：皆さんの感想はどんな感じですか。この番組に出たいのか、または批判的に見ているのか、もしくは楽しむために見ているのか。少し軽い気持ちで。

ハンブルトン：私の学生はインスタグラム世代と言ってもいいのでしょうか。だから、ソーシャルメディアが当たり前で、自分を商品化するのも当たり前と思っている人が多いのです。ただ、どこまで批判的に見る能力を持っているかという、1年生だとなかなか難しい人が多くて、描かれているものを真実か真実に近いかと思っている学生が多いのです。でも、4年生になってくるとだいぶ変わって、批判的に見られるようになってきます。もう少し視聴者の情報が欲しいなと思います。

デール：ありがとうございます。やはりその商品化に関してはいろいろと考えさせられるところがありますね。

ハンブルトン：自分を商品にするということですね。

デール：面白いと言ってはいけないですが。

ハンブルトン：それでいいのかという面はありますよね。

デール：そうですね。では、時間になりましたので質疑応答はこのくらいにして、続きはまたあとのディスカッションでもお話できればと思います。ありがとうございました。

【第2部】

発表①



夢を売り、夢を描く

—ジェンダー視点からみる宝塚歌劇団の経営戦略と
関西圏のファン文化—

バラニャク平田ズガンナ

お茶の水女子大学

要旨

女性の自由を映し出しエンパワーする世界なのか、男性に支配されている社会の反映そのものなのか？ 100年以上の歴史を持つ宝塚歌劇団は未婚の女性のみから構成されており、その公演を観劇する観客の圧倒的多数は女性である。マスメディアが普及してきて〈女性の世界〉としての宝塚歌劇団の認識が強いが、そのイメージとは対照的に多くの先行研究が大手企業の阪急電鉄との関わりを主張し、可憐な舞台の裏を男性中心の世界として描く。本発表では関西圏の宝塚ファンの語りを分析し、兵庫県宝塚市を本拠地とする宝塚歌劇団の経営戦略の方向性と地元の宝塚ファン文化への影響について考察する。

1. 宝塚歌劇団とは？

みなさん、こんにちは。今日は諸事情のため、事前録画での参加とさせていただきます。本日のテーマは「夢を売り、夢を描く—ジェンダー視点からみる宝塚歌劇団の経営戦略と関西圏のファン文化—」です。それでは、よろしくお願いたします。

こちらの2020年東京オリンピックの閉会式の写真をご覧ください（掲載略）。緑の袴を身にまとった宝塚歌劇団の20人の女優たちが「君が代」斉唱を務め、世界の注目を集めました。このオール女性の歌劇団のグループを捉えたニューヨーク・タイムズなどの周流の海外メディアは、「女性のエンパワーメント」を称えてきたと同時に、この風景を家父長制そのものとして捉える人もいました。今日はその対照的なイメージの理由についてと、宝塚歌劇と女性のエンパワーメントの可能性について話していきたいと思います。

1-1 「女性のみ」の世界？

まずは、宝塚歌劇（※chat）1を少し紹介します。宝塚は100年以上の歴史を持って、女性のみで構成されている劇団です。男性の役を含めてすべての役は女性によって演じられていることが特徴で、そのファンの圧倒的多数を占めるのは女性です。歌劇団は5つの組で構成されていて、その5組体制のおかげで、宝塚の公演は通年実施され、毎年約260万人の観客を集めています。宝塚の本拠地は兵庫県宝塚市の宝塚大劇場と東京都日比谷にある東京宝塚劇場です。こうした宝塚歌劇団は、女性の〈夢の世界〉と幅広く認識されています。

話を閉会式に戻しましょう。初めて宝塚を知る多くの人々は、海外メディアと同じように女性に人気、女性の出演者しかいない歌劇団を女性の社会的進出の印だと捉える場合が多いようです。しかし、こうした女性のみで〈夢の世界〉の捉え方とは真逆に、この〈夢の世界〉のイメージを作り出してきた家父長的な企業文化が存在していることも現実です。

1-2 企業文化と宝塚歌劇の関係性

宝塚歌劇団は阪急電鉄の創業者、小林一三によって創立されましたが、今でも阪急の一部門です。現在は、阪急電鉄の鉄道事業と不動産事業に続く「第3の柱」として主に二つの役割を果たしています。その一つ目は、戦前から続く阪急鉄道の乗客誘致の役割です。ベッドタウンに遊園地や劇場を立てて、観劇者を含めてできるだけ多くの観客に電車に乗ってもらうねらいです。そして、もう一つの役割は「清く正しく美しく」という宝塚歌劇団の専属宝塚音楽学校の校訓で何一つスキャンダルを引き起こさない理念です。この理念を保つことを通して宝塚は企業メセナとしての阪急電鉄のPR道具としてすごく重要な役割を果たしています。

こうした宝塚歌劇団は「女性のみ」の歌劇団としてよく勘違いされ、実際に、「女性のみ」の歌劇団の部分は宝塚の出演者のみにとどまっています。この「女性のみ」の〈夢の世界〉は、女性だけによってではなく、男性中心の企業構造のもとで企画して、作り出されています。宝塚歌劇の作家、演出家や振付師をはじめ、歌劇団のプロデューサーや理事団体のメンバーは圧倒的に男性です。強いて言えば、宝塚を女性のみで世界として描き出すイメージは妄想です。

1 デール chat：宝塚のファンはいますか？

参加者 chat ①：近年の公演はみていませんが、2000年代から2010年代半ばまでファンでした！

参加者 chat ②：宝塚ファンです！全組見えます。

参加者 chat ③：テーマとはそれなのですが、100年ほど前から海外（パリレビューなど）の文化を紹介する役割を意識していたと思われる宝塚歌劇団が文化の盗用にどう向き合っていくのかに非常に興味を持っています。

1-3 これまでの先行研究・本日の目的

さて、これまでの宝塚歌劇に関する先行研究の中では、だいたい3つの議論があります。宝塚歌劇団の歴史的発展と男役の誕生（例えば、川崎1999、津金沢1999、渡辺1999）、男役ジェンダーパフォーマンスの構築過程とそのパフォーマンスの魅力（Robertson 1998、Nakamura and Matsuo 2003、Stickland 2008）、そして男役とファンとの関係性（宮本2011、東2015）について行ってきた研究があります。宝塚の〈夢の世界〉の形成過程に着目する研究が多いのですが、そのほとんどは舞台上の〈夢の世界〉にとどまってしまう、宝塚歌劇の劇場の外に存在する〈夢の世界〉について議論していません。

今日は、その劇場の外に存在する〈夢の世界〉に焦点を当て、兵庫県宝塚市にある宝塚歌劇団の本拠地に目を向けたいです。女性の役者によって描かれた〈夢の世界〉と家父長制的な企業文化によって売られている〈夢の世界〉は、女性のエンパワーメントとつながることが可能なのでしょうか？ 今日、宝塚市の宝塚大劇場の外、都市空間の中の〈夢の世界〉に着目し、関西圏の宝塚ファン文化の特質と女性のエンパワーメントの可能性について議論したいと思います。

2. 関西圏の宝塚ファン文化と都市空間の関係

2-1 関西圏の宝塚ファン文化の特質

まずは、関西圏と関東圏の宝塚ファンの行動にはどんな違いがあるのか（※ chat）2説明します（スライド1）。東京宝塚劇場を中心に観劇する関東圏のファ

2 デール chat：関東と関西の違いはあるようですが、どうでしょうか？
自分の宝塚の「空間」はありますか？

参加者 chat ④：私は関東に住んでいて東京中心の観劇だったのですが、宝塚の空間というと舞台上だけを思い浮かべます。

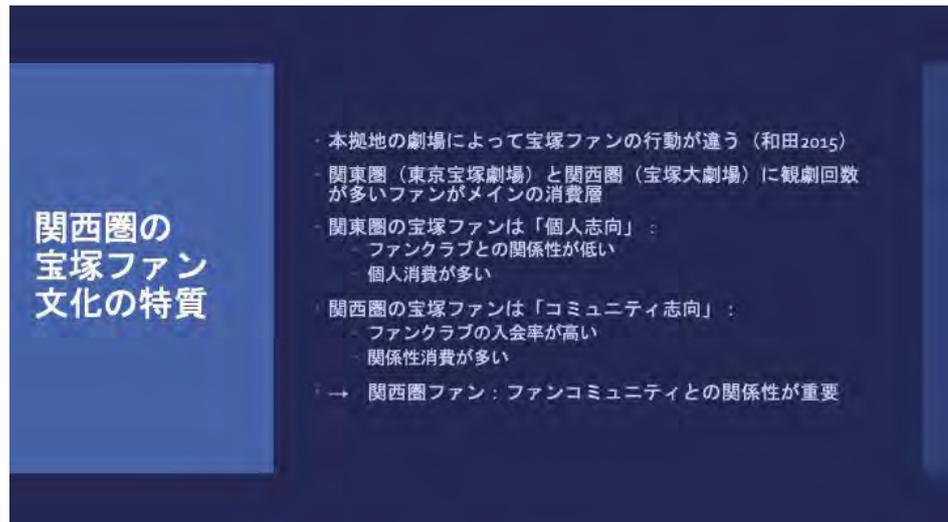
参加者 chat ⑤：東京宝塚劇場は劇場の内部だけが「空間」であり（周囲に商業施設や他の劇場があるため）、宝塚大劇場は宝塚駅～花のみち～宝塚大劇場までの経路を含めた近隣一帯が「空間」であるように、個人的には感じています（生徒さんと遭遇する率が極めて高いことも、少なからず関連しているようにも思います）。

デール chat：面白いですね！ 宝塚のファンとして、コミュニティや、他に一緒に楽しむ仲間がいることは大事ですか？

参加者 chat ⑥：一人でも十分楽しむことができますが、コミュニティとのつながりはチケットの取りやすさなどに影響してくると思います。

参加者 chat ⑦：私はあまりそう思いません。田舎の中高生で周りにファンが全くいない中、頻繁に観劇に行けないうまファン活動をしていた期間が長いからかもしれません。ファンクラブは人間関係が面倒くさいと聞いたので怖気づいて入りませんでした。

デール chat：そうか……コミュニティに参加する特権、めんどくささ、様々な側面がありますね。



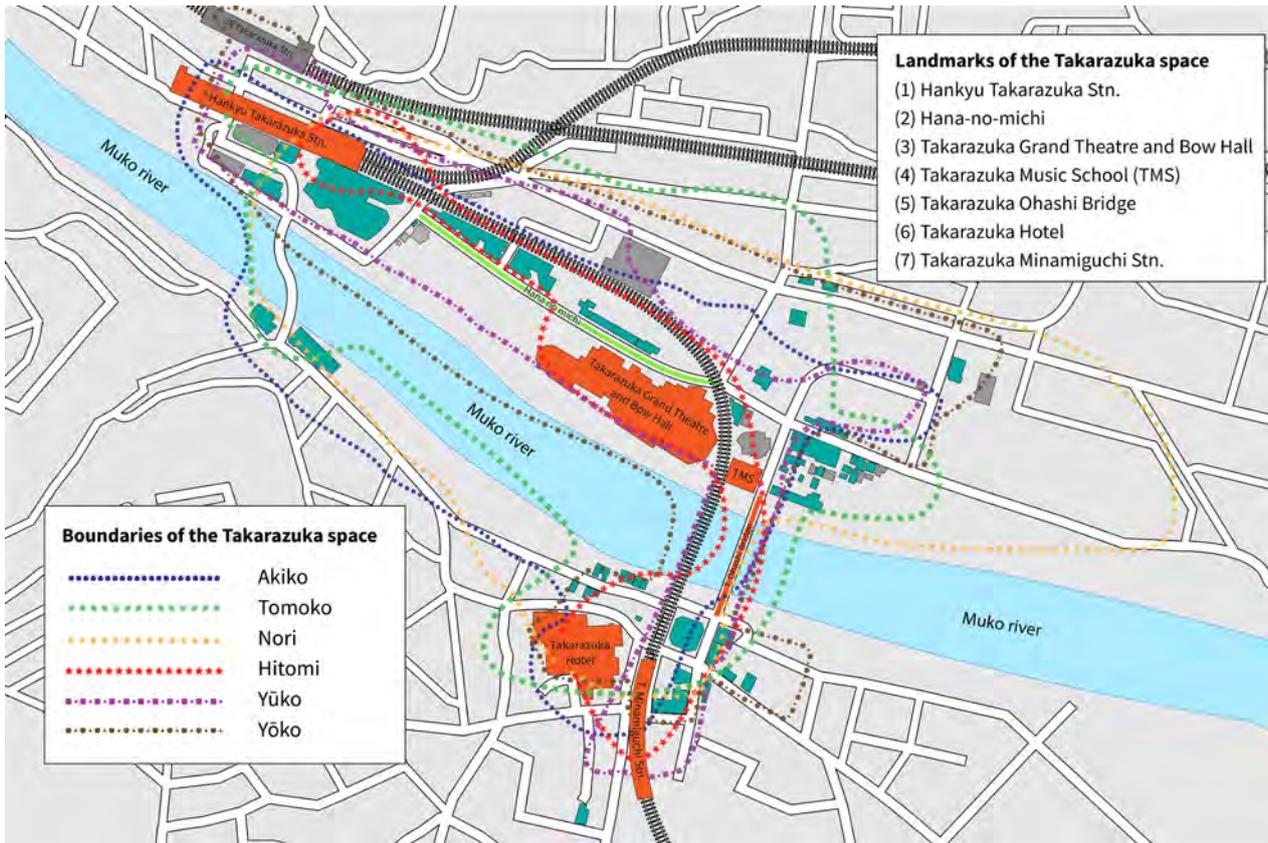
スライド1

んと、宝塚市の宝塚大劇場を中心に観劇する関西圏のファンは、両方とも観劇回数が多いです。しかし、和田（2015）による調査してきた宝塚ファンの消費パターンを見ると、関東圏の多くのファンは宝塚のファンクラブに入会せず、宝塚歌劇関連のグッズを自分のための観劇の補完として買っています。一方、関西圏のファンの間には、ファンクラブの入会率が高くて、その多くの消費は宝塚の役者やファン同士での関係性を構築し維持するためにあてられます。つまり、関西圏の宝塚ファンの最も大きな特徴は、ファンコミュニティ志向です。

2-2 タカラヅカの空間とは？

その関西圏の宝塚ファン文化を研究するために、私は2017年から2018年にかけて宝塚市でフィールドワーク調査をしました。そこで関西圏の宝塚ファンとインタビューをするときに宝塚の〈夢の世界〉の魅力について何えは、何回も「タカラヅカの空間」という言葉が出てきて、その言葉の意味を探りたくなりました。それぞれのファンは様々な文脈で「タカラヅカの空間」について話をしますが、全員が同じ〈空間〉を指しているのか、全員がその言葉を同じ意味合いで使っているのかを知りたかったのです。その2つの質問の回答を得るために2018年に再度インタビュー調査をして、6名の宝塚ファンにその「タカラヅカの空間」のスケッチマップを描いてもらいました。結果はこちらです（スライド2・p30）。

こちらの地図は、宝塚市の中核となっている、阪急宝塚駅から阪急宝塚南口駅間の地域の地図です。この地図上にそれぞれのファンに自分の観点からタカラヅカの空間の境界線を描いてもらいました。ご覧になった通りに、境界線の間にはかなり激しい差がありますが、すべての線はだいたい同じ地域を囲んでいます。まずは、すべてのファンが描いてきた宝塚の空間の境界線の中に含まれていた共通点です。合計すると、7つのランドマークは共通していました。それは、以下の7カ所です。



スライド 2：タカラヅカの空間の地図

- (1) 阪急宝塚駅。
- (2) 花のみちという通路と (3) 宝塚大劇場とパウホールという小劇場
- (4) 宝塚音楽学校と (5) 宝塚大橋
- (6) 旧宝塚ホテルと (7) 阪急宝塚南口駅

そのランドマークのすべては宝塚歌劇団の公演を観劇するときに、宝塚大劇場にアクセスするために利用する鉄道の駅や通路、あるいは宝塚歌劇関連のイベントに参加する時に使う施設とつながります。

しかし、ファンが描いてきた空間の境界線の中で他の建物も頻繁に出てきます。地図上に緑色で示した部分です。それはどんなところで、なぜ宝塚の空間の中に取り入れたのか。

こちらは、その建物の事例です (スライド 3)。左上は喫茶店で、右上はきもの屋さんで、中央は花屋さんです。すべての店には宝塚歌劇の上演中公演のサイン入りのポスターが表面に貼られています。この地域にある多くのお店はポスターを提示することで宝塚ファンに宣伝すると同時に宝塚歌劇の応援を示しています。

または、このような宣伝はお店の外だけではなく、店内にもあります (スライド 4)。左上はカフェのお店の写真で、右上は雑貨店、中央はお菓子屋さんでした。提示されているのは、サイン入りのポスターだけではなく、役者さんからの礼状やパーソナルカレンダーなどもあります。このように、一般人でも、初めて宝塚市に来た宝塚ファンでも、その店を見れば一瞬で宝塚歌劇団、宝塚の〈夢の世界〉との関係性を分かるように宣伝されていて、タカラヅカの空間を作りあげています。



スライド3：お店の事例



スライド4：店内の様子

2.3 ファン文化の「場」づくり

さて、その劇場の外にある〈夢の世界〉の続きはどのような特徴を持っているのか。まずはアクセシビリティです。「タカラヅカの空間」は劇場内だけではなく、公共の都市空間の中にもあって、宝塚ファンでも一般人でも、誰でもいつでも入ることができる空間となっています。その地域は多くの宝塚ファンにとって「聖地」と思われていて、宝塚ファンは特別感と親しさの気持ちを感じていますが、その聖地には誰でも入ることができます。つぎに、関西圏のファン文化の特徴ともつながりますが、ファンクラブの活動を通して多くのファンは観劇をしない日でもこの地域を訪れます。3つ目に、どんな宝塚ファンであったとしても、その劇場の外の空間は宝塚ファンコミュニティが集まりやすい場所となっています。

このように、タカラヅカの空間はただの都市空間ではなくて、宝塚ファンの〈サードプレイス〉となります。サードプレイスはRay Oldenburg (1989) の概

念で、自宅と職場以外に、社会的ニーズに応じるために作られてきたコミュニティライフの「アンカー」です。この場合に、この物理的な宝塚市の都市空間は宝塚ファンの居場所になり、ファン文化そのもののコミュニティ形成過程に非常に重要な役割を果たしています。

おわりに：〈夢の世界〉の再考

宝塚歌劇は100年以上の歴史を持っていますが、その〈夢の世界〉は現代社会の変化を受けています（※chat 3）。昔、25歳までに「寿退団」（結婚のため退団）をしていた宝塚の役者さんは、現在、30代後半までキャリアを続ける場合がほとんどで、1970代～80年代までは主に女子学生と専業主婦だった宝塚ファンも現在、多くの場合は20代～30代の働く女性です。役者さんのキャリアが長くなれば、その役者を応援するファンも長年応援し続けるようになり、最終的にファンコミュニティ全体に長期的な変化が見られると言えるでしょう。タカラヅカの空間の中に含まれていた多くのお店は女性の営業主によって運営されて、そのほとんどの人は宝塚ファンや宝塚OGです。このように、宝塚の〈夢の世界〉は舞台上のパフォーマンスにとどまらず、劇場の外にも続いています（※chat 4）。

今日は宝塚歌劇の〈夢の世界〉の二つの側面について話しました。一つ目は家父長的な経営戦略のもとに作り出された〈夢の世界〉。もう一つは劇場の外で作られた都市空間の〈夢の世界〉です。この両方の側面があるからこそ、宝塚市の中核となっている地域に女同士のファンコミュニティの〈居場所〉が作られて、女性のエンパワーメントとつながると言えるでしょう。

今日の発表は以上です。ご清聴ありがとうございました。

3 参加者 chat ⑧：宝塚は、女性の若さが重視される日本の芸能界で元トップスターですらも退団後の活躍が難しいと私は見ていて、非常にジェンダーギャップの問題を感じています。特に男役のような「珍しさ」がない娘役さんが。また男役は「女性に戻る」ことが期待されているのを感じます。しかし近年は七海ひろきさんなど元トップスターでなくてもキャリアを築いている方（しかも男性っぽい恰好のまま）やユーチューバーとして活躍する方、タカラジェンヌのセカンドキャリアの問題を訴える方（瞳ゆゆさん）も現われて、変わりつつあると感じています。

4 参加者 chat ⑨：そうですね。特にタカラジェンヌ個人のファンクラブは“私設”なので……。

【第2部】

発表②



中国本土のクィア運動におけるメディア利用

—北京紀安德諮詢センターによる
メディア・アクティビズムを中心に—

于寧

国際基督教大学

要旨

本報告では、2020年に活動終了した中国本土で最初の性的マイノリティ支援団体の一つである北京紀安德諮詢センターの歴史をメディア・アクティビズムの視点から振り返ることを通じて、中国本土のクィア運動におけるメディア利用の状況について考察する。北京紀安德諮詢センターは、1997年にポケベルを用いた個人らによる支援ホットラインとして発足し、2002年に一般企業として登録することで組織化を実現した。それ以来、同センターは当事者のコミュニティ構築とエンパワーメントのために、ポケベルや紙媒体、映像など様々なメディアを利用するだけでなく、2011年には「レインボー・アワード（中国彩虹媒体獎）」を立ち上げ、性的マイノリティに関するマスメディアの報道にも働きかけるようになった。本報告で紹介する独創的なメディア利用は中国本土のクィア運動の一つの特徴であり、その解明がクィア運動の実態に対する理解をさらに深めることができると考える。

はじめに

皆さん、こんにちは。ご紹介に預かりました于寧と申します。本日はこのような機会を与えていただき、誠にありがとうございます。私の報告は主に歴史の話になります。これから中国本土のクィア運動におけるメディア利用について、お話しさせていただきます。まず、単語の説明なのですが、ここでいう「クィア」とは、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーなどを含む、いわゆる規範的なセクシュアリティとジェンダーを持たない性的マイノリティのことを指しています。中国語では「同志」と言います。

そして、「メディア・アクティビズム」とは、「メディアやコミュニケーション技術を利用して、社会や政治における運動を行うこと」を指します。日本の「メ

ディア・アクティビズム」の実践に関しては、こちらの本（『メディアと活性—What's media activism?』（細谷修平編・メディアアクティビスト懇談会企画、2012年）に1960年代から2000年代までの歴史が整理されて掲載しています。

近年、インターネットやソーシャルメディアなどの新しいメディアがアクティビズムにおいて利用されることが多くなっています（※chat）1。中国の場合は、中国版ツイッターと言われる新浪微博（シンランウェイボー）や通信アプリWeChatの公式アカウントといったプラットフォームが多く使われ、脚光を浴びています。

中国の性的マイノリティの権利運動を例に挙げると、例えば、2018年4月に、ウェイボーが発表した違法コンテンツの削除リストに「同性愛」が入っていることに対して、当事者やアライ（allyアライとは、性的マイノリティを理解・支援する人のことを言います）がハッシュタグ「私は同性愛者」をつけて抗議する、という事件がありました。三日後、微博は「同性愛の投稿禁止」を撤回しました。

また、WeChatの公式アカウントも性的マイノリティの団体に発信手段としてよく利用されてきました。ところが、2021年7月に、中国で複数の大学の性的マイノリティの学生団体が運営する公式アカウントが一斉に凍結されてしまいました。これは制限をかけるほど、WeChatの公式アカウントがクィア運動に影響を持っていたと見なされたのでしょうか。

中国本土のクィア運動においては、インターネットやソーシャルメディアが普及する前の90年代から、様々なメディアを使った運動が活発に行われていました。

この報告では「北京紀安德咨询センター」という性的マイノリティのNGOを例に挙げて、中国本土のクィア運動におけるメディア・アクティビズムの歴史を紹介したいと思います。名称に使用されている「紀安德」は英語のgender（ジェンダー）を当て字で表記したものです。ジェンダーの中国語訳に実際に使用されているのは「(社会)性別」です。

1 デール chat：メディア（SNS など）を活動・アクティビズムのために活用している人はいますか？

参加者 chat ①：自分から発信することはあまりしていないのですが、政治的なメッセージを含む投稿をリツイートやシェアしたりしています。

参加者 chat ②：政治的なメッセージをツイート（匿名アカウント）したり、たまにインスタグラム（本名）のストーリーにポストしたり、そのほかオンラインの署名によく参加しています。

参加者 chat ③：どこかで「攻撃されたくない」「Twitterで議論をしたくはない」という思いがあるため、あまり意見をいったりはできていませんが、ハッシュタグをつけてツイートする、連帯を表明する、抗議するといったことを時々しています。

参加者 chat ④：匿名アカウントであってすらも、フェミニスト発言をすると女性蔑視的なまとめサイトにツイートをさらされるのを怖いと思っています。

参加者 chat ⑤：鍵アカウントですが、自分に近いマイノリティと繋がって、経験をシェアしたり、勉強会やイベントの情報をリツイートしたりしています。

デール chat：逆に声を出しにくくなっているってことですね。

1. 中国本土のクィア運動

まずは「中国本土のクィア運動」について、スライド1に示しているように三つの段階に分けて、その歴史と発展プロセスを簡単に紹介します。中国本土におけるクィア運動の発祥は1990年代初期に遡ることができます。

1992年からエイズ予防を主軸に、中国本土で同性愛者の権利を含む広範な市民権利活動を行ってきた万延海さんという方や、1994年に中国の全国規模としては初の同性愛調査（これは主に男性を対象としているのですが）を実施した呉春生さんといった運動家が現れてきました。

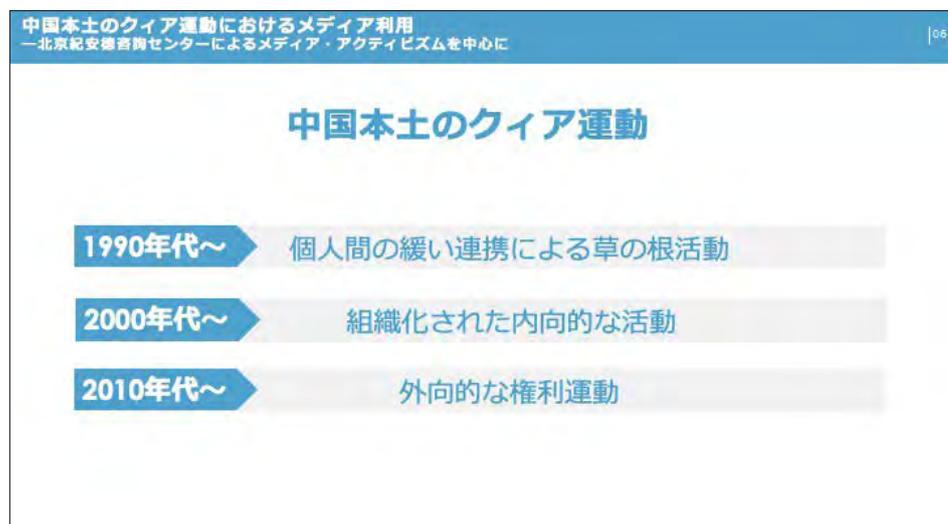
また1997年に中国人と外国人の性的マイノリティの当事者6人がポケベルを使った「99575北京同志ホットライン」を自分たちで開設したり、1998年に北京で当事者の全国大会を開催したりして、2000年代以降のクィア運動を牽引する運動家が生まれるきっかけになりました。

この時代のクィア運動は主に運動家をはじめとする個人間の緩い連携によって行われていました。

2000年以降、同性愛の非犯罪化と脱病理化の実現や、政府主導のエイズ予防の国際協力が深まるのに伴って、クィア運動における国際間の連携が強くなりました。海外の基金や中国にある各国の大使館などからの経済的援助で、スライド2（p36）で示したように、中国本土には性的マイノリティを支援するNGOが現れ、クィア運動が組織化されるようになりました。

しかし、これらの団体は、殆どがNGOとしては当局に登録されておらず、その多くは未登録か、企業として登録されていました。当時はNGOの登録がとても難しかった時代で、活動するためにどうしても法人のステータスが必要な団体にとっては、企業として登録するという選択肢しかなかったのです。

2000年代のクィア運動の特徴としては、当局に非対抗的な戦略や「非政治化」といったことが挙げられ、主に当事者への権利付与（エンパワーメント）やコミュニティの構築などのような内向的な活動が中心となっていました。



スライド1

中国本土のクィア運動におけるメディア利用
—北京紀安德諮詢センターによるメディア・アクティビズムを中心に

2000年代

設立された団体

2002年～ <エイズ予防、セクシュアリティ/ジェンダー平等推進>

- 北京愛知行健康教育研究所 (Beijing Aizhixing Institute)
- 北京紀安德諮詢センター (Beijing Gender Health Education Institute)
- 愛白文化教育センター (Aibai Culture and Education Center)

2004年～ <レズビアン組織>

- 北京拉拉サロン 同語 上海女愛など レズビアン組織
- レズビアンを主体とするNGO 「ピンク・スペース性文化発展センター」 (Pink Space Sexuality Research Centre)

2008年～ <性的マイノリティ全般>

- 北京同志センター (Beijing LGBT Center)
- 同性恋親友会 (PFLAG China, 2021年より「出色伙伴 (Trueself)」に改名)

スライド 2

中国本土のクィア運動におけるメディア利用
—北京紀安德諮詢センターによるメディア・アクティビズムを中心に

2010年代以降

2013年

「同性恋親友会」の100人以上の親たちが中国の立法府「全人代」の代表宛てに同性婚合法化を促す公開書簡を提出

2014年

同性愛者向けの司法援助を提供する団体「レインボー弁護士団 (Rainbow Lawyers)」設立 性的マイノリティへの就職差別や矯正治療めぐり代理訴訟

2014年

同性愛組織のNGO登録申請が却下 民政部を提訴

出典：
<https://site.douban.com/bjgblcenter/widget/notes/1399495/notes/492616384/>

スライド 3

2010年代以降は、性的マイノリティを支援するNGOが司法の場で当局に権利を主張するといった活動が増え続ける変化が現れてきました（スライド3）。具体例を紹介すると、2013年に「同性恋親友会」の100人以上の親たちが中国の立法府である「全人代」の代表宛てに同性婚合法化を促す公開書簡を提出しました。2014年には同性愛者向けの司法援助を提供する団体「レインボー弁護士団」が設立され、性的マイノリティへの就職差別や矯正治療をめぐる訴訟を代理で行いました。

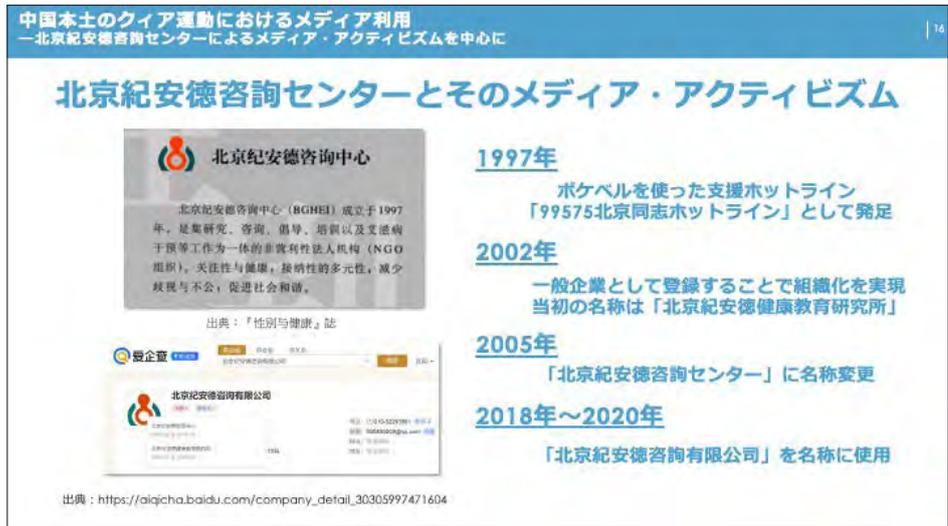
その後、教育部や民政部、国家新聞出版广电总局などに対して、婚姻権や労働権などをめぐって、一連の訴訟が行われました。

以上のように、2010年代には、クィア運動が性的マイノリティの権利保障を目的とする国家政策と法律などの改正やメディア環境の改善などに働きかけるようになり、クィア運動の外向的な志向が強まりはじめたと言えるでしょう。

この報告でこれから実例として取り上げる北京紀安德諮詢センターの発展プロセスは、先ほどご紹介した中国本土のクィア運動における三つの段階の発展をまさに体現しています。

2. 北京紀安德諮詢センターとそのメディア・アクティビズム

ここで紹介する「北京紀安德諮詢センター」は1997年にポケベルを使った支援ホットラインとして発足しました。ここからは、三つの段階に分けて、「北京紀安德諮詢センター」が行ったメディア・アクティビズムの歴史を振り返ります(スライド4)。



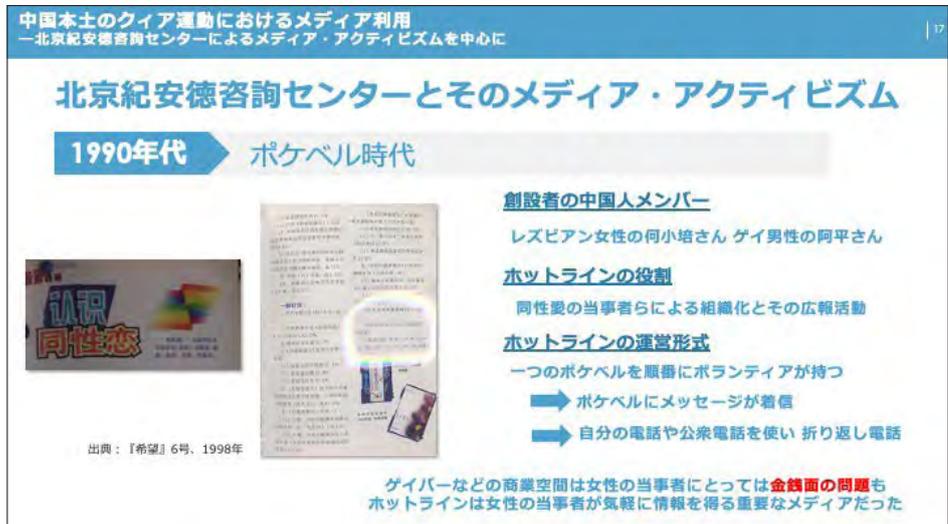
スライド 4

① 1990年代：ポケベル時代

1997年にポケベルを使ったホットラインが開通し、ボランティアが送られてきたメッセージに電話で折り返し、会話を交わすことで当事者に精神的な支えを提供しました(スライド5)。

当時の政治状況の中では、同性愛者の組織を設立することと同性愛に関する出版活動は不可能だと判断したため、比較的安全なポケベルという媒体を使ったそうです。

ホットラインの運営形式は次のようになっていました。一つのポケベルを順番



スライド 5

にボランティアが持って、そこにメッセージの着信があったら、自分の電話や公衆電話を使って折り返しの電話をします。また、ボランティアの間には定期的に対応のトレーニングを行いました。当時中国にすでにあったエイズや女性のホットラインなどからそのノウハウも学びました。

このホットラインを運営する中で、当事者のボランティアは専門家に頼るのではなく、自らが同性愛の真の専門家になるべきだという認識が生まれました。そして、当事者が自ら助け合うことの重要性を認識するようになり、コミュニティをオーガナイズする経験を蓄積していきました。

これらのホットラインの活動を振り返ると、当時の当事者たちは自分たちのためのプラットフォームと発信手段を作るために頑張っていたことが分かります。まとめると、このホットラインは、個人への精神的な支援にとどまり、実質的なサポートを提供することは困難でしたが、当時の当事者の組織化、情報提供、ネットワークづくりの役割を果たしていたと言えます。

② 2000年代：紙媒体時代

ホットラインとしての活動が落ち着きを見せた2002年、この団体は「北京紀安德健康教育研究所」として法人化し、2010年まで郭雅琦さんが代表を務めました（スライド6）。この研究所はエイズ予防と健康教育を軸に、研究活動と報告書出版を通じて、コミュニティ構築活動を行っていました。1990年代には実現できなかった同性愛者の組織を設立することと同性愛に関する出版活動がやっと実現したのです。

研究所がエイズ予防を活動の軸とした背景には、当時の中国衛生部がエイズ予防において、男性同性愛者が積極的に取り組むように政策を調整したことにあります。2003年に中国性病・エイズ予防治療協会が「ボランティア運営委員会」を設立し、男性同性愛者をコアメンバーとして迎え、研究所の代表だった郭さんがその副主任に着任したのです。

研究所は国際エイズ連盟（International HIV/AIDS Alliance）やフォード財

中国本土のクィア運動におけるメディア利用
—北京紀安德諮詢センターによるメディア・アクティビズムを中心に

北京紀安德諮詢センターとそのメディア・アクティビズム

2000年代

紙媒体時代

郭雅琦さん



99575北京紀安德諮詢中心成立于1997年3月
The 95577 Beijing LGBT Hotline was founded in March 1997

出典：ドキュメンタリー映画『認同志』（崔子恩、2008年）

2002年
「北京紀安德健康教育研究所」として法人化

2002年～2010年
代表を郭雅琦さんが務める

2003年
「中国性病・エイズ予防治療協会」が「ボランティア運営委員会」を設立
男性同性愛者をコアメンバーとして迎える
研究所の代表 郭雅琦さんが副主任を兼任

スライド6

団 (Ford Foundation) などの国際組織の支援によって、研究者と共同で、男性同性愛者向けのエイズ予防や教育プログラム、性的マイノリティに関する研究、出版活動を行っていました。

ここからは研究所の10年近くの研究成果について、簡単に紹介します。

研究所は中国本土で最初のゲイ小説家の一人で、1990年代から性的マイノリティ運動に関わっていた童戈さんをメインの研究者に据えて、性的マイノリティに関する様々な調査を行い、報告書を発表しました。一連の研究報告には、御覧のようなものがありました（掲載略）。これらの研究は、エイズ予防に力を入れていたため、ほぼ男性同性愛者を調査の対象としていましたが、2008年の研究では、レズビアンとトランスジェンダーにも言及されるようになりました。

そのほか、中国疾病予防管理センターからの依頼で、正式に中国国内で出版された著書もありました。国の機関から依頼を受けるほど専門性が高まったということは、ホットライン時代に抱えていた当事者自らが同性愛の真の専門家になるべきだという課題がついに実現したということの意味しています。

また、中国人民大学の性社会研究所との連携で、『性別与健康』というジャーナルを創刊し、中国の性的マイノリティ研究を促進しようとしてきました。

研究所のメインの研究者や提携した大学の研究者のほか、研究所のスタッフも様々なジャーナルや論文集に投稿していました。

このように、研究所は2010年までは主に研究活動を行い、手引書や書籍など紙媒体を主なメディアとして活動を行っていました。研究所が出版活動を通して、ただ当事者の話を聞くだけの一对一の個人支援のスタイルから、男性同性愛者コミュニティに向けて、健康生活の指導やエイズ予防啓蒙を行うなど、コミュニティ集団に対する実質的な支援へと変わっていったのです。

③ 2010年代：映像時代

研究所は2005年に「北京紀安德諮詢センター」となり、2010年から2020年までの代表を魏建剛さんが務めました（スライド7）。魏さんは俳優出身で、2000

中国本土のクィア運動におけるメディア利用
—北京紀安德諮詢センターによるメディア・アクティビズムを中心に

21

北京紀安德諮詢センターとそのメディア・アクティビズム

2010年代

映像時代



魏建剛さん

出典: https://mp.weixin.qq.com/s/AVh0RmyL84AjeIN_eechMQ



同志亦凡人
QUEER COMRADES



酷儿大学
QUEER UNIVERSITY



酷儿电影节



LOVE QUEER CINEMA WEEK
酷儿电影节

2010年～2020年
代表を魏建剛さん（俳優出身）が務める

<魏建剛さんの活動>

2007年 LGBTのネット配信番組「同志亦凡人」（Queer Comrades）を制作

2011年 第五回北京クィア映画祭の実行委員会のメンバーに加入
中国本土で数少ないクィア映像を公に上映するプラットフォームの運営をサポート

2012年 「クィア大学ドキュメンタリー訓練營」（The Queer University Video Capacity Building Training）プロジェクトを立ち上げ

スライド7

年代初期から中国のクィア監督の崔子恩さんのインディペンデント映画作品に出演していました。ちなみに、魏さんは2007年にLGBTのビデオポッドキャスト「同志亦凡人」(Queer Comrades)を立ち上げ、インターネットをプラットフォームにして、一連のネット番組を配信した方です。

2010年に魏さんがセンターの代表になってから、映像というメディアをセンターの活動に導入しました。以前からの研究活動が継続される一方で、ドキュメンタリー制作や、映像制作者の育成、映画祭主催など、センターでは映像による活動が活発になりました。前の代表の郭さんが紙媒体に注力したのに対して、魏さんは映像にフォーカスしていたのです。

2011年、魏さんは第五回北京クィア映画祭の実行委員会のメンバーにもなり、中国本土でクィア映像を公に上映する数少ないプラットフォームの運営をサポートしました。

そして、2012年に「クィア大学ドキュメンタリー訓練營」(The Queer University Video Capacity Building Training)プロジェクトを立ち上げ、より多くの映像制作者を育成し、映像を通じた当事者への権利付与(エンパワーメント)を促進しようとしてきました。魏さんの訓練プロジェクトで生まれた新しい作り手によって、様々なクィア作品が産まれました。

この中には、トランスジェンダーの男性を主人公にした中国本土初のドキュメンタリーである『兄弟』(妖妖、2013)や農村部のゲイ男性が自ら制作した『小岳同志』(岳建波、2013)やゲイの息子を持つ父が自らの経験を語る『威風爸爸』(威風爸爸、2016)などがあります。

この訓練プロジェクトは北京などの都市部より地方からの応募者やマイノリティの中でも脚光を浴びにくい人々を優先する方針を取ったため、これまでのクィア作品では取り上げられなかったマイノリティの中でも周縁化されてきたマイノリティを取り上げる一連の作品が産まれました。

また、魏さん自身も数多くのドキュメンタリー映画を制作したほか、他の団体の作品へのプロデュースも多数あります。その中には、障がい者である女性同性愛者を取り上げた『見怪不怪』(妖妖、2017)などがあります。

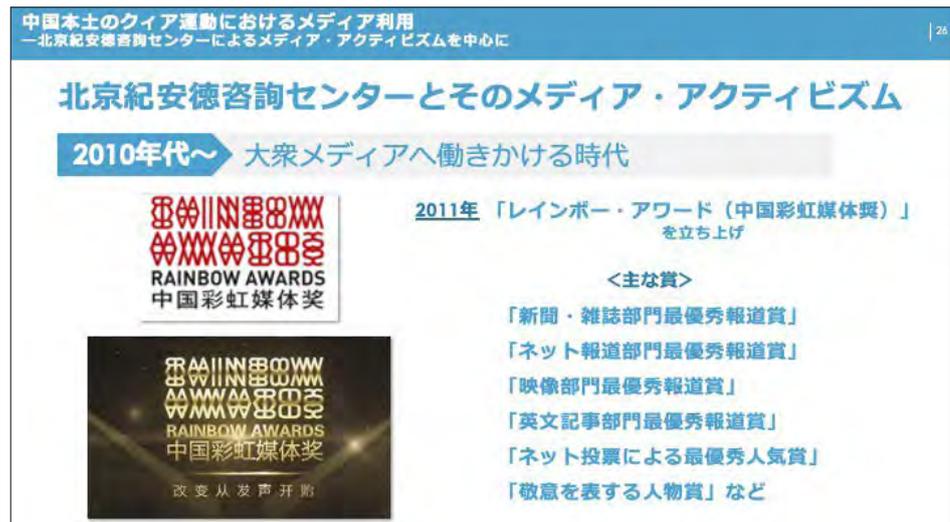
このように、「北京紀安德諮詢センター」は映像制作、配給ルートの構築、新しい作り手の育成に関わっていました。

こうして、センターは映像をコミュニティ構築と権利主張の手段として、積極的にクィア運動に用いるようになりました。紙媒体より伝播性が強く、動画サイトなどにおける拡散は社会の性的マイノリティに関する意識喚起を高めることにも役立ち、映画制作とその視聴を通じて、社会を変えようとしていました。

ここまで、1990年代のポケベル時代、2000年代の紙媒体時代、2010年代の映像時代の三つの段階で、「北京紀安德諮詢センター」が行ったメディア・アクティビズムの歴史を振り返りました。更に、センターにとって、2010年代は大衆メディアへ働きかける時代ともいえるでしょう。ここから紹介します。

④ 2010年代以降：大衆メディアへ働きかける時代

2011年、「北京紀安德諮詢センター」は他の団体と連携し、性的マイノリティ



スライド 8

にフレンドリーなメディア環境を整えるために、大衆メディアにおける性的マイノリティに関する報道を審査する「レインボー・アワード（中国彩虹媒体獎）」を立ち上げました（スライド8）。紙媒体、映像、インターネットなどメディアのジャンルを超えた様々な賞が設けられ、中でも「敬意を表す人物」の賞には、主流メディアで活躍する当事者や、性的マイノリティの権利を擁護した主流メディアの従事者、クィア運動の貢献者などが選ばれていました。

授賞式のほか、報道関係者など主流メディアの従事者に対して、性的マイノリティやジェンダーとセクシュアリティに関する講習会も行っていました。これらを通じて、主流メディアにおけるアライを育成し、メディア領域の専門家を通じて、社会や政策を変えようとすることを図りました。

また、2012年からは、大衆メディアに対するモニターの報告書も刊行していました。問題のある報道に対しては、批判も行いました。

3. まとめ

以上のように、「北京紀安德諮詢センター」はポケベルから紙媒体、紙媒体から映像へと様々な媒体を用いたメディア・アクティビズムを行ってきました。また、2000年代までは、当局に対抗しない戦略をとって、主に当事者への権利付与やコミュニティの構築などのような内向的な活動が中心となっていました。しかし、2010年代からは、センター自らが主流メディアにおけるアライを育成し、メディア領域の専門家を通じて、社会や国家政策に関与するという運動モデルを形成し、外向的な志向を強めました。

残念ながら、センターの活動は2020年に終了してしまいましたが、中国本土のクィア運動において、センターが行ってきた独創的なメディア利用は結果的に大きな財産となったと言えるでしょう。中国本土のクィア運動は現在当局からの反動に直面していますが、センターが果たした貢献は今後の活動に生きてくるでしょう。

私からの発表は以上です。ご清聴ありがとうございました。

【第2部】

発表③



#MeTooから デンジャンニョ (味噌女) まで

—韓国メディアにおける「フェミ/嫌フェミ」をめぐる—

洪ユン伸

一橋大学

要旨

韓国における#MeToo運動はメディアを通して拡散されていった。政治・芸能・文学・教育界において様々な「性暴力」を受けた女性たちが、メディアを通して被害事実を暴露し、その被害者たちに「あなたたちは一人ではない」という#MeToo（性暴力被害の告発運動）がSNSを中心に拡散されていくような形での盛り上がりを見せた特徴がある。これらの動きは、韓国社会の各分野において「性差別」と「権威主義」に対する告発として評価できるだろう。しかし一方で、自らを「フェミニスト」と名乗る人に対するバッシングも強まっている。日常生活においては、ママチュン（ママ虫）やデンジャンニョ（味噌女）などの女性を見下す言葉が生まれた。次期大統領候補が、「女性・家族部廃止」を公約の一つに掲げていることでも分かるように、「フェミニストを嫌う＝（嫌フェミ）」の動きが根強くなっている。これらの一連の動きの共通項に韓国社会の「メディアと女」は重要なファクターとなっている。こうした問題認識のもと、本報告では韓国メディアにおける「フェミ/嫌フェミ」の現状を詳しく検証しながら、性別的な女vs男の二分法を乗り越え、差別に向き合う社会に向かうためにメディアの役割はいかなるものであるべきかを共に考えていきたい。

はじめに

ご紹介に預かりました。洪ユン伸と申します。今日は「#MeTooからデンジャンニョ（味噌女）まで—韓国メディアにおける『フェミ/嫌フェミ』をめぐる—」というタイトルで発表させて頂きたいと思います。

私は大学で韓国の文化や歴史を教えています。現在K-POPになじみのある若い世代にとっての韓国女性のイメージは、このようなアイドル歌手の「化粧」、ヘアスタイル、短いスカートなどのような気がします（スライド1）。

しかし、#MeToo運動が盛り上がり、韓国では、70年代、世界のフェミニストたちが女性に見られる「性」「女らしさ」というものに抗し、ブラジャーを燃やしたような現象、化粧品をすべて捨て、コルセットを脱ぎ、長い髪の毛を



スライド1

はっきり切るなど、性についての自己決定権についての文化的運動が高まっています。

その傍ら、フェミニストを嫌う「兼フェミ」の動きも高まっています。

そして、髪の毛が短ければ「急進フェミ」としてミソジニー（女性嫌悪）にさらされ、見た目ばかりに気を配れば「デンジャンニョ」と呼ばれる現象も起きました。

2000年代以降、このような女性たちは、現実の世界ではもしかしたら「デンジャンニョ」という語で、差別の対象になるかも知れません。

皆さんは、# MeToo（性暴力被害の告発運動）についてはよくご存じと思います。ところが、デンジャンニョとは何か？についてはご存じないと思いますので、先にその話から申し上げたいと思います。

デンジャンニョとは、2006年頃SNSのフェミニストを嫌う男性サイトを中心に作られた言葉で、一般的には外国の有名ブランドや文化を追う女、見た目中心の女を指します。

スライド2（p44）をご覧ください。このように、頭にサングラスをかける、有名ブランド服やカバンは基本で、靴は新作。ダイエットでご飯は食べなくとも、スタバのコーヒーは飲む。そして、デート費用は男性に全て払わせるいわゆる「良心のない女」を指す言葉、差別用語として登場したものでした。左は、男性たちのサイトで紹介されていたもの、右側はこのような現象を説明するために延世大学新聞がイラストレーションにしたものです。

このイラストレーションの画面の中に「男性家族部」という語が入っているのが見えますでしょうか？ 韓国では、民主化された政権であった金大中大統領の際に、社会の弱者、女性、子供、移民などの問題に取り組む「女性家族部」というものが誕生しましたが、その代わりに「男性」が自らのマイノリティ性を強調するためにこの部署の代わりに「男性家族部」と書いてある現象が2006年頃あったわけです。



スライド 2



スライド 3

当時は一部の若干「右傾化」されている「男性」サイトの動きとして見られ、デンジャンという言葉がもたらすユニークさもあり、一般にも笑い話のように流行ったものですが、それが、こうしたいわゆる「外見中心、消費中心」の女性を指すものではなく、「フェミニスト」と名乗る女性たちに向けて発せられるようになっていきました。

そしてとても恥ずかしいことに、現在は、保守から出た有力大統領候補が、20代から30代男性の票を得るために「女性家族部」を廃止するという公約までも出しており、大統領選挙戦の「争点」の一つにもなっています(スライド3)。

発表は20分という限られた時間ですので、#MeTooからデンジャンニョ(味噌女)までの一連の過程が、メディア(SNS)により拡散されたという共通点に絞って考えてみます。

そして、この韓国の事例を通して、これらの現象、つまり「フェミ/嫌フェミ」の対立が、すなわち、男性/女性の問題なのか?を考えてみたいと思います。

1. 韓国の # MeToo 運動

2017年10月ハリウッド発の # MeToo 運動が、SNSを通して一瞬で世界中に拡散していったのはよく知られている現象です。

韓国でもその3か月後に、# MeToo 運動の波が始まりました。2018年1月29日に、JTBCというニュース番組を通して始まったといっても過言ではありません。ソ・ジヒョンという現職検事が検察内で受けた性的猥褻行為についてテレビ番組を通して告発しました。もちろん、従来もこうした動きがなかったわけではありません。80年代にも、民主化運動の学生運動の中で性暴力を受けた女性が、公権力による性暴力を実名で訴え、社会のパラダイム、つまり「性暴力をいうのは恥」という概念を変えたことがあり、また、90年代よく知られるように日本軍慰安婦による告発が、社会的に勇気のある # MeToo 運動の始まりと認識されてはいます。

ただ、ソ・ジヒョン検事の告発は、それが、「裁判闘争」から始まっているのではなく、このように最も大衆が接しやすい時間、最も信頼されているニュース番組と言われていたJTBCのニュースルームからのものであった点で異なっていました。

その後、アメリカでそうであったように、ソ・ジヒョン検事の告発後、「私も(同様の苦しみを受けた)」を意味するハッシュタグ「# MeToo」をつけた書き込みは、告発前の1月4週目は2,022件だったのに対して、2月1週目は71,738件となり、およそ35倍も増えました。# MeTooが社会に浸透していった革命的な事件だったといえます。

その兆しはニューヨークの # MeToo 運動の2年前に始まっていました。

2016年に韓国ソウルのカンナム駅で、帰宅中の女性が公衆トイレを使おうとした際に、トイレで待ち伏せていた男性に無残に殺された事件が発生したのです。「女性なら誰でも良かった」という犯人の言葉は社会に衝撃を与えました(※ chat) 1。そして「女性である故に殺されたあなたを追悼します」という波へと広がっていきました(スライド4・p46)。

多くの女性はその駅に立ち寄り、このようにポストイットを使って(※ chat) 2、「自分たちも殺されたかも知れない」「私も同様の経験がある」と書き込んで貼り、語り始めました。運動は徐々にエスカレートし、男性の中にも一緒に追悼しましょうという動きが出てきました。また、「スカート履いて夜道を歩けないのはおかしい」など、殺されたのを女性の責任にする言説を防ぐものとしても発展していきました。

1 参加者 chat ①：日本でも幸せそうな女性を殺したかったという事件が少し前に起きましたが、大きなムーブメントにはならず、その犯人の発言を報道しないメディアもありました。韓国では日本よりも女性嫌悪という概念が社会に認知しているように感じます。

2 参加者 chat ②：大阪の駅で女子学生が暴行された事件では、事件現場にポストイットがはられたのですが、ネットには器物損壊だという言葉があふれすぐに駅員に外されてしまいました。政治的行為が本当に社会に受け入れられていないと思います。また発信者が女子高校生だと酷くバッシングされると思います。

2016年カンナム駅殺人事件 女性だから殺害された



スライド 4



スライド 5

さらに、ソ・ジヒョン検事のJTBCニュースでの告発以降、芸能界、文化、政界などの分野でも次々訴える人々が出て、あらゆる分野に#MeTooが拡散されて行きましたが、とりわけその中で重要な事件が、ソ検事がそうであったように同じJTBCニュースルームに出演し、職場内の性暴力を訴えたキム・ジウン秘書の告発でした。

彼女が訴えた上司は、忠清南道地方の道知事で次期大統領候補とも言われていましたが、この事件を受けて、2018年3月に辞任しました。

このようにして、2019年の春をピークとして、#MeToo運動はあらゆる分野に拡散していきました。子どもから中年男性など、たくさんの方々の支援を受けてこの運動が広がっていくのですが、とりわけユニークなのは、#MeTooだけでなく、「あなたの隣りに立つ」という#WithYou運動にまで広がったことです。

さて、ここは何処だと思いますか？ (スライド5) これは高校です。(※ chat) 3なんと韓国社会の# MeToo運動は、「スクール# MeToo」、つまり高校の先生による猥褻行為を高校生が訴える動きまでに拡散しました。彼女たちは親を説得し、卒業生との連帯の中で裁判まで起こしたケースがあります。

2. フェミ (# MeToo) と 嫌フェミ (デンジャンニョ・ママチュン)

ここまで見てきたように、韓国社会での# MeToo運動は、非常に高い関心や支持基盤のもとに拡散されたと思われます。では、デンジャンニョはどう解釈したらよいのでしょうか？

MeToo運動は2017年のハリウッド発で各国に拡散しましたが、実はその12年も前に、初めてハッシュタグ# MeTooを広めたのが、この女性タラナ・バーク (Tarana Burke) でした (スライド6)。もちろん、2017年にCNNが選定した「Silence Breakers (沈黙を破った女性達)」の中に入っています。

彼女が# MeToo運動を始めたのは、黒人女性や子供、貧困層などの最も脆弱な階級の人たちが暴力を訴えることができないでいる状況のなか、「自分もその経験がある」と示してあげることが、最も大きな勇気を与えることになるからだといいます。その背景には、性暴力を訴えた子供にそうやってあげられなかった彼女自身の体験への後悔があります。そこには階級や人種差別などの問題も入っています。彼女は、# MeToo運動は男性と女性の対立で理解されがちだが、そうした認識だけで拡散するのは危ない。この運動の背後には、有色人



スライド6

3 デール chat : 高校だ……すごいですね。日本でも同じように、このような活動は高校や大学で想像できますか？ または、ありましたか？ 自分が知っている限りではあまりないですね……。

種、階級差などで、もっとも脆弱な位置にさらされて日常的に# MeTooをしなければならぬ女性たちが多く存在していることに焦点を当てるべきだというようにインタビューに答えています。

こうした問題意識を受けて、私たちも先ほどのテンジャンニョについて、もう少し考えていきたいと思えます。

韓国では、テンジャンニョという言葉の次に、「mamchun (ママ虫)」という言葉が出てきました。これは育児中の女性たちが、「夫が出勤して一生懸命働いている昼間に優雅にカフェでコーヒーを飲んでいる」と、育児中の女性たちを皮肉って呼んでいる言葉です。

2016年に韓国で出版された『82年生まれ、キム・ジョン (原題: 82년생 김지영)』という本は、1982年に生まれた平凡な女性が、結婚、出産、育児を経験しながら徐々に精神的に病んでいく過程を描いた小説です。著者のチョ・ナムジュ自身が、育児で仕事を休まざるを得ない時期に「mamchun」と呼ばれ、うつ病になった経験がもとになっています。韓国で130万部以上のベストセラーとなり、世界中で翻訳されました。日本でも翻訳書が出版された2019年だけで100万部以上売れています。これは何を意味するのでしょうか？

育児・出産を抜きにしても、単純に、性別によって男性と女性は平等ではない社会の中で生きています。日本と韓国は、OECD加盟国の中でも、男女賃金格差が最も大きい国の1、2位を毎年争っています。

さらに、長引くコロナの状況の中、女性たちの家庭労働の負担が増えました。スライド7は2021年10月に日本のNHKと韓国の『京郷新聞』が発信していたWebニュースの記事を並べたものです。非常に興味深く感じたのは、同じ時期に同じような記事が掲載されていたことです。日本ではコロナ下において30代女性の自殺率が74%に増加しました。韓国では育児負担などから精神的に病んでいる女性たちが70%を示しているということが報道されています。

現在の韓国の# MeToo運動は、先頭に立って告発する女性は「実名」でメディアに出て、有名人を訴える形をとっています。そこに多くの匿名の# MeToo

**「希望」の断絶・
コロナ下での女性のワーク**

NHK2021年10月2日
30代女性の自殺率74%増加

韓国京郷新聞2021年10月28日
コロナ10か月女性育児負担70%へ



30代以下の女性の自殺 去年比74%増加 新型コロナの影響も

NHK 出典
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/2021/10/02/k10012644551000.html>



出典: 『京郷新聞』2021年10月28日

スライド7

が寄せられる、という形にパターン化されています。ですが、先頭に立った女性たちは相手が有名人であればあるほど、権威を持つ男性相手に自分も世論にさらされることとなります。二次被害に遭い、全てを失ってしまうという構図が、実は# MeToo運動の中にあります。

実際、「(告発以降) 30年間使った名前も変え、整形手術もした」女性(故ソウル市長に対する# MeToo告発者、2022年現在)もいますし、「(勇気を出して告発して) 名前と顔も公開したが、依然として人々が信じない」といった状況(元忠清南道地域・都知事に対する告発者は陰謀論、不倫説などの二次被害を経験)などもあります。

また、「スクール# MeToo」のケースでは、昨年告発された教員の63%がまだ教壇に立っています(『ハンギョレ新聞』2021年12月9日記事)。訴えた相手が実際の裁判闘争までいくと、何も処罰されないという現実があるのです。盗撮されたことに対する被害申告率も、韓国では1.9%に過ぎません(統計庁・女性家族部発表2020年統計)。

おわりに

最後に、これは結論を出すというわけではありませんが、非常に考えたい問題はここです。# MeToo運動が拡散したのは、女性がある程度自立して、社会的にも声を出せるようになった、泣き寝入りをする女性像から大きく変化した、沈黙を破ることが可能な時代になったということが背後にあります。

けれども、# MeToo運動で先頭に立つ女性は顔と名前を出してすべてを失うリスクを負うのに、# MeTooをする女性の痛みはなかなか理解されないという構図が依然としてあると思います。運動として盛り上がっても、なかなか裁かない法律の壁もあります。

MeTooをする女性たちは、匿名性があるからこそ拡散することができます。テンジャンニョとかمامチュンなどの「兼フェミ」の発信も匿名ですが、それは# MeToo運動の匿名性と同様のものではありません。# MeTooの匿名性は「経験」に基づくもので、その一人一人がサバイバーだからです。

今日は韓国の事例を紹介しましたが、結婚と出産、育児などによって、夢を断絶された女性たち、希望を失っていく女性たち、加害者が裁かれないという嘘のような現実に立ち向かっている女性たちの多くが、顔を出せないでいます。

MeToo運動は、数の面では生物学的に男性対女性に見えているのですが、実は社会的な弱者を理解するための土台が必要であり、# MeTooが、ジェンダー意識により理解される時、生物学的な男性と女性の問題を超え、LGBTや障害者に対する性暴力を含むもっと多様な# MeTooができる健全な社会になれるのではないかと思います。

それを希求しながら本日の韓国の事例紹介を終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

【第 3 部】 デイスカッション

司会／モデレーター：デール・ソイヤ（インディペンデントリサーチャー）

パネリスト：ハンブルトン・アレクサンドラ（津田塾大学）

バラニャク平田ズザンナ（お茶の水女子大学）

于寧（国際基督教大学）

洪 ユン伸（一橋大学）

Q&A コーディネーター：郭 立夫（東京大学）



デール chat：皆さん、質問があれば、いつでもこちらの方に書いてください。

参加者 chat ①：（北京紀安徳諮詢センターは）2020年に活動終了されてしまったのですね……。活動終了の理由がわかれば知りたいです。

デール：それではデイスカッションを始めたいと思います。

皆さんの発表はすごく面白くて、かなり幅広い感じでしたが、でも少し落ち込みますね。現実だし、仕方がないことなのですが、きちんとそういうことについていろいろ話ができればいいなと思います。

最初に、発表の内容に関して于寧さんとユン伸さんに質問があるのですが、まず于寧さん、2020年に北京紀安徳諮詢センターは活動を終了されたそうですが、その理由が分かれば教えてください。

于：そうですね。2020年に活動休止になりました。その原因は後継者がいないためです。魏さんは代表になって、2000年代から10年間ずっと頑張ってきたのです。後継者が育たなかった背景には、ここ数年当局からの統制が厳しくなったことがあります。今までNGOが常にトレーニングや教育プログラムをやっているのです。そこから、対象者はボランティアなどいろいろですが、そこから次に関わる人になるということが昔はあったのですが、ここ数年そういうプログラム、集まるイベントができなくなって、持続的にできなかったのも、後継者の教育、育てることが難しくなったことにあると思います。教育プロジェクトを実施できなくなったことが大きいかなと思います。

参加者 chat ②：クィア活動の歴史がとても興味深かったのですが、中国の政権がクィア活動について反対していないのか、その中でどのように対抗しているのか教えてください。

あとは、新型コロナウイルスの問題が出てきてからは、人が集まるイベントも難しくなっているのです。もし感染者が出たら、運営者が責任を負わなければいけないから、性的マイノリティの集まるイベントだけではなく、全体的に人が集まることに対して制限が厳しくなっていて、そこも現実的にはある程度関係があると思います。

デール：もう一つの質問なのですが、中国の政権はクィア活動について反対していないのか。その中でどのように対抗しているのか教えてほしいという質問です。

于：これに関しては、中国本土では、当局の態度が曖昧です。当局の性的マイノリティに対する態度について、「不支持、不反対、不提倡（支持しない、反対しない、提唱しない）」という「三不原則」で表現されてきています。この原則は一見、中立のように見えますが、私の理解では、性的マイノリティの存在を無視するようなこの原則は、当事者の権利主張を難しくしてしまっています。中国の衛生政策、エイズ予防では積極的に当事者を取り入れようとしているため、中国では当事者によるエイズ予防活動は合法的に行っていて、先ほど NGO の登録が難しいという話をしましたが、エイズをテーマにした NGO は性的マイノリティの団体であっても、2010年代半ば以降は NGO として正式に登録できるようになっているのです。このように、当事者によるエイズ予防活動はセーフなのですが、衛生部以外の他の政策では当事者の権利についてあまり言及されていなくて、例えば、映画を検閲する電影局の関連条文では「同性愛」という言葉は、アイデンティティとして扱っているよりは、わいせつな性表現として見ているのです。

中国の正式な政策の中では、女性や児童は主体として存在していますが、性的マイノリティは主体としては見なされていません。存在すらしないため、性的マイノリティはまだ当局に相手にされていないと言えるでしょう。ですから、ここ数年は性的マイノリティは反動に直面しているのですが、それは「存在すらしない主体」をターゲットに特化したものより、今、中国は少子化問題のため、結婚させよう、3人目の子どもを産ませようという当局が押し進めようとするジェンダー・セクシュアリティに関する主流のイデオロギーに相応しくないものを排除しようとする流れの中で、性的マイノリティ運動が二次的な被害を受けていると自分は理解しています。

参加者 chat ③：味噌女の由来は何なんですか？

デール：ありがとうございます。次にユン伸さん、デンジャンニョの由来は何でしょうか。

洪：デンジャンニョの由来は、味噌は見た目がウンコに似ていますよね。そういう匂いがするというような嫌悪的な表現です。言葉の意味としては、外見至上主義や、デート費用を男性に全部払わせるようなものを皮肉っぽく言う言葉です。それ以外にも、醤油女やショウガ女、キムチ女など、さまざまな食べ物に例えた言葉が差別語という形で出てきています。

参加者 chat ④：子供を産まない理由が貧困だとの見方が主流ですが、多分、より根本的な理由は自分の運命が自分の手にないことでしょう。

昔、皆が貧乏でお金がなかったですが、土地があって、大地に根を下ろし、運命が自分の手にあったので、子供を産むことにそれほどの躊躇がなかったと思います。

今、自分の将来を決めるのは雇ってくれる会社があるのかどうか、他人に決められています。

参加者 chat ⑤：女性の社会進出が進めば生まれる子どもの数（合計特殊出生率）は上がりますか？ 男性の家庭進出も同時に必要だと、聞いたことがあります。また、もしあれば、他国の前例も教えてください。また、他に、持続可能社会を作るために、少子高齢化への対策はありますか。

デール：その差別語は主に女性に対してですか。

洪：女性ですね。女性に対して「〇〇女」というレッテルを貼るような形の用語ですが、それに対して、韓国ではフェミニストたちを中心に全く同じ形で言い返そうと、韓国人男性をできない男という形で皮肉を込めた用語をつくって対決するなど、さまざまな争いが言葉を巡ってありました。

デール：ありがとうございます。発表者の皆さん、お互いに何か聞きたい質問や、気になったこと、ぜひ話したいことがあれば、どうですか。

ハンブルトン：一ついいですか。中国もそうですし、韓国もそうなのですが、少子化が進んでいて、少子高齢化が進んでいるわけなのですよね。それが日本の場合には結婚しないからなど、最近では草食男子がどうのこうのといろいろな人のせいにされるのですが、中国の場合と韓国の場合はどうなるのか聞ければうれしいなと思います。主に女性のせいにされるのか、性的マイノリティのせいにされるのか。ぜひ聞きたいなと思います。どちらからでもいいです。

洪：少子化の問題は、日本と非常に類似した形で同時進行しているのが現状です。もちろん、結婚しない女性、つまり先ほど # MeToo のところでも申し上げましたが、# MeToo を男性から男性への攻撃として受け入れるという男性も多いのですが、それと全く同じく、結婚しないのは女性が働いて声が大きくなったせいだというような批判は依然としてあります。しかもコロナ期間において、去年は出産率が1を下回り、0.8という最悪の数字になりました。そういうことも、社会構造的な問題、コロナ禍で孤立して希望を失っている状況を見ずに、結婚しない女性という、それ1点には絞っていないけれど、社会的な偏見は依然としてやはりあると思います。

デール：0.8人というのはすごいなと思います。

洪：そうですね。去年が最悪でした。

デール：于寧さん、ぜひ。

于：中国に関しては、自分はあまり詳しくないのですが、中国も今年公表された新生児の数字は、歴史上で一番少ないということでした。詳しくは調べていませんが、ネット上では結婚しない、子どもを産まないことについて、やはりフェミニズムに対するバッシング、バックラッシュが今すごく発生しています。

今中国では男女の対立がホットトピックになっていて、さまざまなSNSで、中国版のTikTokとWeChatにおいても今のフェミニズムがおかしいと煽ることがはやっているというか、フェミニズムのせいにするという傾向は、自分の観察ではあると思っています。また、結婚しない、子どもを産まないのは、若い人

の経済状況が良くないためだというのも認識されてきていて、原因はお金がないところにあるのだから、国に対して経済状況を改善してくれないと、どんなキャンペーンをやっても結婚はしないという共通認識を持っている人が男性にも女性にも少なくないと思います。

ちなみに、少子化問題を性的マイノリティのせいにするというのはたまにネットでも見かけます。今、「中性的な男性」のSNS・ソーシャルメディアのアカウントが凍結・削除されていることが中国国内外ですごく話題になっていて、しかもこれは西洋のイデオロギー、西洋からの影響で、中国の伝統的な男性・女性ではなくなっているという、そういうことのせいにする風潮もあります。そこでこのような流れで、性的マイノリティを未婚化・少子化問題の原因にするということもあつたりします。性的マイノリティは、当局が求めようとする「正しい男性」と「正しい女性」として結婚して3人目の子どもを産むという、ジェンダー・セクシュアリティに関する主流のイデオロギーから逸脱しているため、非難の対象になつたりはします。

私が1990年代の調査をしていて、性的マイノリティの運動の中で、当時の運動家の言説に面白い現象があつたのです。1990年代は政府に対抗しないという方針を取って、自分たちは国の政策に違反しないので認めてくださいという方向性で運動をしていたのです。当時、中国は一人っ子政策を取っていたので、私たちは子どもをつくらないから国にとって有利ですよ、中国の人口問題の解決に貢献しているのですよ、だから認めてくださいというようなものがあつたのです。それが今は子どもをつくらないことを理由にバッシングを受けているというのは歴史的に見ても興味深いと思っています。

洪：ハンブルトン先生に質問があります。まず、先生の発表を聞きながらとても興味深く、バチェラーにしろ、バチェロレットにしろ、お金がなければ主人公になれないという資本主義を前提とした番組ですよ。恋はお金なしにはできない、最初の土台から、そういうゲームセッティングになっているというのが1点目です。

2点目は、先生の発表の中で最も面白かったのは、ジェンダーロール、男の役割、女の役割が、たとえ女性が主人公になってもその構図は変わらないのだということを非常に興味深く聞きました。実際ここまでフェミニズムが発展している日本社会の多くのフェミニストたちは、ある種の女性表象にもつながるわけですよ。そこに出てきた非正規労働者の女性たちも従属的な女を演じているわけです。それに対する批判的な日本国内でのフェミニストの動きはあるのか、あるいはそういう研究はあるのかということを知りたいと思います。

ハンブルトン：ありがとうございます。まず、お金がないと結婚できない。これはエマ・クック (Emma Cook) 先生がいろいろ研究していて、男失格、男性として失敗しているという研究をたくさんされていて、すごく面白い結果もたくさん出ているのですが、お金がないと結婚できないというのは事実のように見えるわけなのです。

先週も沖縄に住んでいる若い女性、10代で妊娠して、できちゃった結婚をして、結婚、離婚、出産を繰り返している人がすごく貧困に陥っていて、沖縄県でも問題になっているという報道もあったので、若くして結婚して子どもをたくさん産んだとしてもバッシングされる、批判される。お金がない状態で子どもをつくっても批判される。でも、子どもをつくらなくてもすごく批判されて、なぜ産まないのかと責められるので、正しい選択肢はないという問題なのです。ただ、韓国と同様、日本の貧困率も年々上がっていて、コロナによってまた非常に苦しんでいる人が増えたのも事実です。

日本社会の中のフェミニズムに対するバックラッシュは、非常にありますよね。これも加野彩子先生がすごくすてきな研究をたくさんしているのですが、2000年代に一度、日本の女性解放運動が成功した動きがあったのです。学校でもジェンダーフリー教育が行われたり、性教育の中でも男女が平等であるべきだという教育がいろいろな学校で導入されたのです。

ところが、右翼という強過ぎるかもしれませんが、保守派の政治家がそれを見てバッシングし始めて、学校でそういう話もできなくなってしまったし、私の学生は、学校でフェミニズムのことを学ばなかった、学びたかった、学校で教えるべきだという発言をしたりしているのですが、本当はなぜできなかったのか、なぜシラバスの中になかったかということを考えないといけない。そのバックラッシュが今でも続いていると思います。ですので、女性が主人公になったとしても、できること、許されることは今でも限られているのだと、パチエロレットを見る前に期待していて、楽しみにしていたのですが、最終的にかっかりしますね。次はもしかするともう少し違うかもしれないですけども。次があるとしたら。

参加者 chat ⑥：聞き逃してしまったかもしれませんが、韓国の主要メディアにフェミニスト的視点はあると思われますか？

デール：これもつながっている質問です。視聴者の方から、韓国のメディアに関してですが、「メインストリームメディアにはフェミニスト的な視点はあると思われませんか」ということです。ハンブルトン先生と于寧さんにも同じ質問を聞きたいです。中国と日本はどうですか。メインストリームメディアにフェミニズム的な視点はあるのでしょうか。

洪：韓国では、# MeToo の話でも紹介したように、最も多くの大衆がアクセスできるメインメディアのメインニュースでカミングアウトできるという状況にまでなっているということは、韓国のメディアがある程度、フェミニスト的な、フェミニズムに対する理解がベースにあると考えていいと思います。日本ではいわゆる生産性の議論がありましたが、もし同じような議論が韓国にあったら、もっと大きなメディアによる企画記事になっているのではないかと考えたりもします。メディア環境において、韓国は日本よりはもう少し女性の観点に立っているさまざまなツールがあるのではないかと思います。

ハンブルトン：あるのはあるけれど、まだそんなにメインストリームではないのではないかと、いつもテレビをつけると思います。例えば、ネット記事で見

て、「日経 xwoman : DUAL」などで割とフェミニスト的な視点から家事の分担や男女の役割などを分析したりしているものはあるのですが、見てみるとフェミニズムのごく一部しか反映されていないことが多いのです。割と経済的に裕福な家庭、共働きで二人とも正社員、お金のある家庭に焦点を当てて、実際にフェミニズム運動の中で重視されている貧困女性の話はそこまでピックアップされないか、されたとしても、女子高生ビジネスなど割とセンセーショナルな取り上げ方が多いと思うのです。NHKに就職する男女の割合を見てみると、やはり男の人の方が圧倒的に多いし、大手メディアでも全体的にそういう傾向があるので、まだまだ改善すべきところはたくさんあるのですね。

于：中国メディアに関しては、感覚的な話になってしまいますが、テレビや新聞など伝統的なメディアであるほど保守的に見えます。ジャーナリズムやジャーナリストのプロフェッショナルには、フェミニスト的な視点を持っている人はいるかもしれません。でも、検閲が存在するため、その視点から書いた記事が出せるかどうかというところにも問題があります。ネットなどの新しいプラットフォームは、制限はありますが、伝統的なメディアと比べるとフェミニスト的な視点などから書かれた記事は比較的に出しやすいと思います。プラットフォームによる反応の差が結構激しく感じるのです。WeChatの公式アカウントで、正しい知識を持って発信しているところはないわけではないのです。でも、伝統的なメディアがその機能をきちんと果たしているかどうかは自分も疑問に思っています。

デール：ありがとうございます。そうですね。メインストリームメディアにフェミニスト的な視点があまり強くないのにすごくバックラッシュがあることは不思議なことだと思います。では次に、またQ&A担当の郭さん呼びたいのですが、何か面白い質問はありますか。

郭：二つ、先ほどの討論の中で出てきたところなのですが、まとめて申し上げます。

まず于寧さんに対して、私の研究テーマとすごく重なっているところがあるので、ここで別に議論しなくてもいいのですが、もう少し明確にする背景を聞きたいと思っています。特に、運動がなぜ止まったのかという話になってくると、中国ではNGOが登録できない状況になっているということがしばしば言われるのですが、ただ、それはLGBT系のNGOだけではなく全体的な状況なのです。独立映画やメディアなども同じで、独立映画をやると、全体的に取り締まれるという感じです。特に独立映画運動のやり方も、クィアメディアのやり方と同じで、コミュニティをつくってそこから資源を共有してやっていくというような流れの中で、では、クィアメディアやクィアメディア運動の特徴は一体どういうものかというところを説明したら分かりやすいのではないかと思います。もし何かご存じであれば教えていただきたいと思います。

また、洪さんに対して質問が一つあります。洪さんのご発表の中で、黒人の# MeToo運動を立ち上げた人が# MeToo運動に対する批判をしているという

ことでした。そこで彼女が # MeToo 運動に対して問うたのは、Me とは一体誰なのかということなのです。フェミニズムの中でずっと議論されてきた話の中で、女性とは一体誰かという質問が出てきて、私の観点では、トランスジェンダーの話が出てくるのです。特にトランス女性の話が出てきまして、特に近年、フェミニズムの中におけるトランス排除というのがすごく強くて、私が調べたところでは韓国でもそれが結構強いのです。そこで私が気になっていたのが、韓国の # MeToo 運動の中でトランスジェンダーやトランス女性の位置付けはどのようなものなのでしょうか。

于：はい。郭さんの背景説明には賛成です。性的マイノリティの NGO が他の NGO と同じような環境にあるというのはおっしゃる通りです。ただ、まだ中国の NGO や市民運動を全体的には見ていないのですが、今答えられる範囲で言うと、先ほど性的マイノリティの権利運動は初期に当局に対して非対抗的な戦略を取ってきて、2010 年代に入ってから当局に対抗できるようになったという歴史的变化を述べました。しかし、映画制作を例にすると、当局に直接働きかける戦略をあまり取っていないことから、性的マイノリティが制作したインディペンデント映画は、その他のインディペンデント映画と比べて、あまり当局に対抗的ではないと思うのです。もっと直接的に政治的な議題を取り扱うインディペンデント映画も多数存在するので、そちらの方が当局から受ける圧力がより大きいわけです。

このようなインディペンデント映画の強い政治的批判性が原因で中国のインディペンデント映画祭は国内では開催できなくなっているのですが、北京クイア映画祭は北京にあるフランス文化センターの中で毎年開催できています。去年も 11 月に北京クイア映画祭が開催され、現在インディペンデント映画祭の中で唯一無事に開催できているのが性的マイノリティの映画祭です。それはもちろんフランス文化センターの中でやるので、外交的な条約で保護されているからというのがありますが、その他に、当局にとって性的マイノリティはそれほど政治的ではない、あまり相手にされていないというのがあると思います。また、メディア・アクティビズムの方のインディペンデント映画作品の中には、抗議運動の手段とするような作品もあるのですが、性的マイノリティのアクティビスト・ドキュメンタリーの中にはそれほど強烈な当局に対する政治的批判性を持つものが多くないのです。

そういう印象的な話しか言えないのですが、形的には性的マイノリティをテーマとするインディペンデント映画は二重の抑圧を受けています。テーマとして同性愛ははっきりと検閲の対象になっていて、インディペンデント映画という制作形式も当局に許されないものなので、性的マイノリティをテーマとする映画制作には二重の抑圧を受けているように見えるのですが、実際、他のインディペンデント映画やメディア・アクティビズムの特定の対象と比べるとそこまで強烈な政治的批判性を持っておらず、当局から受けた抑圧もそれほど強くないというのが現状です。一言でまとめると、性的マイノリティの運動は当局に直接働きかける戦略をあまり取っていないことが特徴的で、それに対する分析は面白い課題になるでしょう。

洪：興味深い質問をありがとうございました。先ほど紹介したタラナ・バークさんの場合は、別に# MeToo 運動を攻撃する、批判するインタビューというよりも、これはイギリスメディアでやったものなのですが、この# MeToo 運動が生物学的に女対男として見えることによって、実はジェンダー概念のさまざまなマイノリティの問題、カミングアウトできないようなもっと脆弱な位置に置かれている黒人問題、階級問題、多様な問題がこのジェンダー概念に対しての問題提起自体があまり表面化されないというパラドックスに陥るのだということを警告するものでした。これがメディアによってタイトルだけが、男性を敵に回してはいけないというタイトルだったので、誤解を呼んだのですが、それは違うということとは申し上げておきます。

その上で、先ほどの質問の重要性は、その中で女とは誰かという問題、特にトランスジェンダーを含めた問題提起というのは、非常に大切な質問だと思います。なぜならば、# MeToo というものが、男性に対する攻撃として受け止められてしまう背後には、異性愛を前提とした構図があるわけですね。男性と女性の間のセックスだけを問題にしているものが、今コミュニティで流れているSNS上などの# MeToo もそうですし、結局、被害者は女性で、訴えられるのは男性という構図が表面で見られる状況があるのですが、ジェンダーに対する理解の土台幅を広げれば、トランスジェンダーやクィアなどの問題も含めて多様な話ができると思います。

実際韓国では『# MeToo の政治学—コリア・フェミニズムの最前線—』という本が出されて、これは日本語にも翻訳されています（刊行は大槻書店）。この中では、今おっしゃったトランスジェンダーの問題も含めて多様な議論をすべきだという論考も入っています。ですから、韓国ではフェミニストの中では、# MeToo 運動に対する男対女というセックスの区分ではなく、トランスジェンダーも含めての議論、まして韓国では性を変える手術を受けた後に軍隊から強制的に除隊させられて、自殺するに至った女性など、さまざまな事件が# MeToo 運動とともに語られています。もちろんまだ大衆的な支持基盤は# MeToo までではないのですが、だからこそジェンダー概念を異性愛から脱して、教育によってそういう土台をつくってこそ、今おっしゃった質問ができる。当然のように# MeToo は女対男の問題ではないという社会に近づくのではないかと思います。とても良い質問をありがとうございました。

デール：ありがとうございます。この話は今日で終わらないなと思います。質問があるたびにまたいろいろな方向に行けるなと思います。ぜひまたいろいろと今日出てきた話題について深く話したいなと思います。時間になってしまったのですが、最後に発表者の皆さんに、これから自分の分野で何を期待しているのか、メディアとジェンダーとセクシュアリティで、別に無理して前向きな答えを出さなくてもいいのですが、これから何が変わるのか、何を期待できるのかということについて、短く答えていただければと思います。少し幅広い質問ではあるのですが、自分が答えたいように答えてください。

参加者 chat ⑦：女性差別は階層社会の一部だと思います。階層のない社会、皆が平等である社会が実現されたら、女性差別もなくなるでしょう。

ハンブルトン：本当にもう少し多様化していくメディアを期待しています。高い視聴率を取れるからショッキングな感じで描いたりするのではなく、バイセクシュアル、性的マイノリティ、外国出身、ハーフなどいろいろな人がいろいろな場面に登場してくるようになることに希望を持っています。もちろんもっと暗い話はたくさんありますが、最後は明るい感じで。

デール：ありがとうございます。次は于寧さん、よかったです。

于：自分の分野に対してというのは、答えがずれてしまうかもしれませんが、これからどうなるか見ていかないと分からないので、将来の期待というよりは、今できることを大事にしたいと、きちんと今までの資料を整理し、歴史を残すように研究する人がどんどん現れてきてほしいというのが今の自分の気持ちです。

デール：ありがとうございます。

洪：すごく難しい質問ですが、私が研究を通してやりたいのは、一言で言えば、自分自身が何かを知ってからこそ、加害者の位置に立ち得るということを実感する、そういう文章を書けたらいいなと思います。

もう 1 点、先ほど質問の中に、皆が平等でなければ女性差別はなくなるという話がありましたが、差別という定義において、自由・博愛・平等を掲げたフランス革命でも、女性は政治的な人間ではなかったわけですし、選挙権を得るために 100 年以上、三世代にかけて戦わなければなりません。日本と韓国では特に女性が選挙権を獲得したのは敗戦後です。しかし今、ここまで女性が自分の声を出せるようになった。女性が多くの挫折をしながらも声を出し続けてきた歴史が、女性が政治的な人間になり得る過程をつくったと思います。ですから、身近な現場から、女である自分も加害者になり得るということを多くの学生たちと一緒に自覚しながらこれからも研究を続けたいと思います。

デール：ありがとうございます。郭さんもよかったです。期待しているものを。

郭：ありがとうございます。先ほどのお話なのですが、于さんが最後に言っていたように、中国では 2020 年には団体の活動がとても難しくなって、中国の LGBT 運動の中ではほとんど実在の団体が消えていく状況にあると。私は最近、SNS の研究をし始めたのですが、そこで見つけたのが、2020 年から中国の Weibo で LGBT に関するキーワードの件数が倍増しているのです。2020 年には 1000 件しかなかったのが、2021 年には一気に 3 万件になったのです。そのような状況の中で、SNS の空間がすごく大切になっていて、特に中国では今実在の空間ではほとんど活動できない中で、このような状況でどうやって見ていくのかというのが、やはり第 4 波フェミニズム的な視点を入れて見ていかないといけないなと考えています。社会的に実在の空間の中での運動が縮小している中では、

オンライン空間で、匿名性などの問題はあるけれども、量的に見るとすごく活発になっているので、ここからは少しだけ希望が見えています。

デール：ありがとうございます。そうですね。私も同じくです。SNSをそんなに使っていないのですが、結構Netflixの番組も観たりしているのですが、そこはやはりLGBTが入っているものが増えていきますね。私もそれを見てすごく希望を感じています。自分が子どもの頃にその番組を観たら人生が違っていただろうと思うのです。ですので、社会的にいろいろな問題はまだ残っているし、増えている。でも、いろいろな多様性が少しずつ可視化されています。可視化されていることだけでも少し希望はあるかなと思います。でも、オンライン空間が大事だということも、皆さんがオンラインで集まっていることもその証拠かなと思います。

ありがとうございました。現実的な暗い話はたくさんあったのですが、皆さんとお話できて本当によかったです。今日はありがとうございました。視聴者の皆さんも実際に顔を見ること、声を聞くことはできなかったのですが、チャットの方に皆さんから意見を頂いたりできて、本当にありがとうございます。イベントに参加するために時間をつくってくださってありがとうございます。皆さん、ありがとうございました。

参加者 chat ⑧：発表ありがとうございました。現代社会のジェンダー構造やセクシャル・マイノリティ、#MeToo運動など世界には様々なジェンダー問題が存在していることがわかりました。

参加者 chat ⑨：貴重なお話を聞かせてくださり、ありがとうございます。ありがとうございました！！

参加者 chat ⑩：とても興味深かったです！ありがとうございます！

参加者 chat ⑪：素敵な機会をありがとうございました。

講師略歴

■ ハンブルトン・アレクサンドラ

Alexandra HAMBLETON

2017年東京大学大学院学際情報学環で博士号取得。現在、津田塾大学学芸学部英語英文学科講師。専攻は、カルチュラル・スタディーズ、メディア、ジェンダー、セクシュアリティ。

■ バラニャク平田ズザンナ

Baraniak-Hirata, Zuzanna

マンチェスター大学日本研究優等学士、お茶の水女子大学大学院ジェンダー社会科学修士、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士後期課程在籍中。

現在、埼玉大学・聖心女子大学非常勤講師。研究のキーワードは宝塚歌劇、都市文化、空間論、ファン文化研究、経営戦略、ジェンダー論。2019年度渥美国際交流財団奨学生。

■ 于寧【う・ねい】

YU Ning

南京大学日本語学科学士。東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻（表象文化論）博士後期課程満期退学。現在、国際基督教大学ジェンダー研究センター研究員、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属 教養教育高度化機構特任研究員。研究テーマ「中国インディペンデント・クィア映像文化」「中国本土におけるクィア運動の歴史」。2020年度渥美国際交流財団奨学生。

■ 洪 ユン伸【ほん・ゆんしん】

HONG Yunshin

早稲田大学アジア太平洋研究科「国際関係学」博士号取得（2012年3月）。現在、一橋大学非常勤講師。関心分野は、政治思想、哲学、安全保障学。フェミニズム批評理論など。博士課程では「占領とナショナリズムの相互関係—沖縄戦における朝鮮人と住民の関係性を中心に」をテーマに研究。2008年度渥美国際交流財団奨学生。

デール・ソイヤ (インディペンデントリサーチャー)

2022年2月20日(日)14時~17時、第68回SGRAフォーラムを開催しました。Zoomウェビナーを利用した完全オンライン形式です。コロナ禍の影響で、なかなか実際に会うことができませんが、このような形で皆さんとイベントができることはありがたいです。テーマはデジタルや新メディアの時代にふさわしい「夢・希望・嘘—メディアとジェンダー・セクシュアリティの関係を探る」です。東アジアを中心に、日本、中国、韓国の事情についての発表とディスカッションがあり113名が登録、参加してくださいました。発表者はハンブルトン・アレクサンドラ先生と元渥美奨学生3名—バラニャク平田ズザンナ先生(2019年度)、于寧先生(2020年度)、洪ユン伸先生(2008年度)。Q&A担当は郭立夫さん(2021年度)、モデレーターはデール・ソイヤ(2012年度)です。開会挨拶は、SGRA代表の今西淳子さんがしてくださいました。このイベントに多くの渥美奨学生に関わってもらい、またジェンダー・セクシュアリティを専門とするメンバーが増えていることに、感謝と喜びを感じています。

基調講演は津田塾大学のハンブルトン・アレクサンドラ先生。「今の時代、白馬に乗った王子様って必要？リアリティーテレビの『バチェラー・ジャパン』と『バチェロレッテ・ジャパン』から見たジェンダー表象」というタイトルで、最近流行っている恋愛リアリティ番組から見える社会現象についてです。最初に現代日本の結婚および少子高齢化社会をめぐる言説と婚活事業を紹介してくださいました。結婚や出産に関して政府の視野が狭く、日本に住んでいる人々の現実を十分把握できていないとの指摘です。経済的に苦勞している人が多く、与えられた性別によってサバイバルの対策が異なります。日本の「バチェラー・ジャパン」で見られるように、男性と結婚することで経済的な安定を求める女性が多くいます。しかし、同時にこのような恋愛リアリティ番組も固定概念に基づいているラブ・ストーリーしか描こうとしていません。多様性が反映されていないことが問題です。ハンブルトン先生の結論として、白馬に乗った王子様は今の時代に必要です。しかし、その王子様はお金持ちの男性ではありません。必要となっているのは社会福祉の改善と全ての人のための暮らしやすい社会作りです。

講演の後は3名の元渥美奨学生による各20分の発表でした。バラニャク平田ズザンナ先生(お茶の水女子大学)は「日本の宝塚歌劇団とファン文化」、于寧先生(国際基督教大学)は「中国本土のクイア運動とメディア利用」、洪ユン伸先生(一橋大学)は「韓国のフェミニズムと嫌フェミニズム運動」についてです。

バラニャク平田先生は事情によりリアルタイムで参加できず、事前に録画していただいたものを流しました。「夢を売り、夢を描く：ジェンダー視点からみる宝塚歌劇団の経営戦略と関西圏のファン文化」という発表で、宝塚歌劇団の歴史的・社会的な背景を紹介した上でファンからの聞き取り調査から得た情報を共有していただきました。宝塚歌劇団は「夢の世界」として売られているもので、その「夢の世界」を家父長的な経営戦略および都市空間という二つの側面から分析し、女性ファンのエンパワーメントを考察しました。

次は于寧先生による「中国本土のクィア運動におけるメディア利用—北京紀安德諮詢センターによるメディア・アクティビズムを中心に」という発表です。歴史的な視点から、時代に合わせて活動家が使っているメディア媒体の変化や直面する社会問題などを紹介していただき、中国本土のクィア活動について知る重要な機会となりました。発表で紹介された北京紀安德諮詢センターの活動は終了したとのことで、マイノリティ団体が活動を長く続けることの難しさを改めて実感しました。しかし、団体そのものがなくなっても成果を残せば、従来から続いている運動に活用できるので、過去にとっても将来にとっても貴重な社会貢献だといえます。

最後の発表は洪ユン伸先生による「#MeTooからデンジャンニョ（味噌女）まで：韓国のメディアにおける『フェミ／嫌フェミ』をめぐって」という発表でした。近年、韓国のフェミニズム運動が可視化された一方、フェミニズムバッシングも増えたとのことです。その背景及び現象を紹介し、韓国の#MeToo運動が直面する課題などを説明してくださいました。学校などの公的な場所での#MeToo運動がある一方で、バッシングを受ける恐れから実名で自分が受けた経験について語るができない現状があるそうです。韓国においてフェミニズムはまだ物議を醸す話題です。韓国の#MeToo運動に対して、シスジェンダーとヘテロセクシャル、いわばマジョリティの立場にいる女性と男性から視野を広げる必要もあり、これからの課題としてLGBTや障がい者を取り組むことも必要とのことでした。

最後は4名の発表者とのディスカッション・質疑応答です。韓国、中国と日本のメディアとジェンダー・セクシュアリティや社会問題などについて話し合い、時間が足りないほど幅広く様々な話題にふれました。議論された課題の中には検閲の問題、政府の政策と出産・結婚やメディアの関係性、メディアにおける多様性、フェミニズム運動におけるトランスジェンダー女性の位置付けなどがありました。

ジェンダーとセクシュアリティの話になると、現状を把握した結果、絶望的になりやすいですが、最後に皆さんがそれぞれの分野で今期待していることについて話しました。様々な社会問題が残っており、男女平等もまだ果たしていない東アジア（台湾以外）に同性結婚やトランスジェンダーの権利がまだできていないのが現状ですが、少しずつ変化も感じられます。また、皆さまと対談ができることも、とても嬉しいことです。これからも、このような対談が増えていくことを期待しています！

（デール・ソ ज्या「第68回SGRAフォーラム『夢・希望・嘘—メディアとジェンダー・セクシュアリティの関係を探る』報告」より転載）

■ デール・ソ ज्या DALE Sonja

ウォリック大学哲学部学士、オーフス大学ヨーロッパ・スタディーズ修士を経て上智大学グローバル・スタディーズ研究科にて博士号取得。これまで一橋大学専任講師、上智大学・東海大学などで非常勤講師を担当。現在、インディペンデントリサーチャー。ジェンダー・セクシュアリティ、クィア理論、社会的なマイノリティおよび社会的な排除のプロセスなどについて研究。2012年度渥美国際交流財団奨学生。

SGRA レポート バックナンバーのご案内

- SGRA レポート01 設立記念講演録 「21世紀の日本とアジア」 船橋洋一 2001. 1. 30 発行
- SGRA レポート02 CISV 国際シンポジウム講演録 「グローバル化への挑戦：多様性の中に調和を求めて」
今西淳子、高 偉俊、F. マキト、金 雄熙、李 來賛 2001. 1. 15 発行
- SGRA レポート03 渥美奨学生の集い講演録 「技術の創造」 畑村洋太郎 2001. 3. 15 発行
- SGRA レポート04 第1回フォーラム講演録 「地球市民の皆さんへ」 関 啓子、L. ビッヒラー、高 熙卓 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート05 第2回フォーラム講演録 「グローバル化のなかの新しい東アジア：経済協力をどう考えるべきか」
平川 均、F. マキト、李 鋼哲 2001. 5. 10 発行
- SGRA レポート06 投稿 「今日の留学」「はじめの一步」 工藤正司 今西淳子 2001. 8. 30 発行
- SGRA レポート07 第3回フォーラム講演録 「共生時代のエネルギーを考える：ライフスタイルからの工夫」
木村建一、D. バート、高 偉俊 2001. 10. 10 発行
- SGRA レポート08 第4回フォーラム講演録 「IT 教育革命：ITは教育をどう変えるか」
白井建彦、西野篤夫、V. コストブ、F. マキト、J. スリスマンティオ、蔣 恵玲、楊 接期、
李 來賛、斎藤信男 2002. 1. 20 発行
- SGRA レポート09 第5回フォーラム講演録 「グローバル化と民族主義：対話と共生をキーワードに」
ベマ・ギャルボ、林 泉忠 2002. 2. 28 発行
- SGRA レポート10 第6回フォーラム講演録 「日本とイスラーム：文明間の対話のために」
S. ギュレチ、板垣雄三 2002. 6. 15 発行
- SGRA レポート11 投稿 「中国はなぜWTOに加盟したのか」 金香海 2002. 7. 8 発行
- SGRA レポート12 第7回フォーラム講演録 「地球環境診断：地球の砂漠化を考える」
建石隆太郎、B. ブレンサイン 2002. 10. 25 発行
- SGRA レポート13 投稿 「経済特区：フィリピンの視点から」 F. マキト 2002. 12. 12 発行
- SGRA レポート14 第8回フォーラム講演録 「グローバル化の中の新しい東アジア」 + 宮澤喜一元総理大臣をお迎えして
フリーディスカッション
平川 均、李 鎮奎、ガト・アルヤ・ブートゥラ、孟 健軍、B. ヴィリエガス 日本語版2003. 1. 31 発行、
韓国語版2003. 3. 31 発行、中国語版2003. 5. 30 発行、英語版2003. 3. 6 発行
- SGRA レポート15 投稿 「中国における行政訴訟—請求と処理状況に対する考察—」 呉東鎬 2003. 1. 31 発行
- SGRA レポート16 第9回フォーラム講演録 「情報化と教育」 苑 復傑、遊間和子 2003. 5. 30 発行
- SGRA レポート17 第10回フォーラム講演録 「21世紀の世界安全保障と東アジア」
白石 隆、南 基正、李 恩民、村田晃嗣 日本語版2003. 3. 30 発行、英語版2003. 6. 6 発行
- SGRA レポート18 第11回フォーラム講演録 「地球市民研究：国境を越える取り組み」 高橋 甫、貫戸朋子 2003. 8. 30 発行
- SGRA レポート19 投稿 「海軍の誕生と近代日本—幕末期海軍建設の再検討と『海軍革命』の仮説」 朴 榮濬
2003. 12. 4 発行
- SGRA レポート20 第12回フォーラム講演録 「環境問題と国際協力：COP3の目標は実現可能か」
外岡豊、李海峰、鄭成春、高偉俊 2004. 3. 10 発行
- SGRA レポート21 日韓アジア未来フォーラム 「アジア共同体構築に向けての日本及び韓国の役割について」 2004. 6. 30 発行
- SGRA レポート22 渥美奨学生の集い講演録 「民族紛争—どうして起こるのか どう解決するか」 明石康 2004. 4. 20 発行
- SGRA レポート23 第13回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか」
宮島喬、イコ・プラムティオノ 2004. 2. 25 発行

- SGRA レポート24 投稿 「1945年のモンゴル人民共和国の中国に対する援助：その評価の歴史」 フスレ 2004. 10. 25 発行
- SGRA レポート25 第14回フォーラム講演録 「国境を越えるE-Learning」
斎藤信男、福田収一、渡辺吉鎔、F. マキト、金 雄熙 2005. 3. 31 発行
- SGRA レポート26 第15回フォーラム講演録 「この夏、東京の電気は大丈夫？」 中上英俊、高 偉俊 2005. 1. 24 発行
- SGRA レポート27 第16回フォーラム講演録 「東アジア軍事同盟の過去・現在・未来」
竹田いさみ、R. エルドリッチ、朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート28 第17回フォーラム講演録 「日本は外国人をどう受け入れるべきか- 地球市民の義務教育-」
宮島 喬、ヤマグチ・アナ・エリーザ、朴 校熙、小林宏美 2005. 7. 30 発行
- SGRA レポート29 第18回フォーラム・第4回日韓アジア未来フォーラム講演録 「韓流・日流：東アジア地域協力におけるソフトパワー」 李 鎮奎、林 夏生、金 智龍、道上尚史、木宮正史、李 元徳、金 雄熙 2005. 5. 20 発行
- SGRA レポート30 第19回フォーラム講演録 「東アジア文化再考- 自由と市民社会をキーワードに-」
宮崎法子、東島 誠 2005. 12. 20 発行
- SGRA レポート31 第20回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合：雁はまだ飛んでいるか」
平川 均、渡辺利夫、トラン・ヴァン・トウ、範 建亭、白 寅秀、エンクバヤル・シャグダル、F. マキト
2006. 2. 20 発行
- SGRA レポート32 第21回フォーラム講演録 「日本人は外国人をどう受け入れるべきか- 留学生-」
横田雅弘、白石勝己、鄭仁豪、カンピラバープ・スネート、王雪萍、黒田一雄、大塚晶、徐向東、
角田英一 2006. 4. 10 発行
- SGRA レポート33 第22回フォーラム講演録 「戦後和解プロセスの研究」 小菅信子、李 恩民 2006. 7. 10 発行
- SGRA レポート34 第23回フォーラム講演録 「日本人と宗教：宗教って何なの？」
島蘭 進、ノルマン・ヘイヴンズ、ランジャナ・ムコパディヤヤー、ミラ・ゾンターク、
セリム・ユジェル・ギュレチ 2006. 11. 10 発行
- SGRA レポート35 第24回フォーラム講演録 「ごみ処理と国境を越える資源循環～私が分別したごみはどこへ行くの？～」
鈴木進一、間宮 尚、李 海峰、中西 徹、外岡 豊 2007. 3. 20 発行
- SGRA レポート36 第25回フォーラム講演録 「ITは教育を強化できるか」
高橋富士信、藤谷哲、楊接期、江蘇蘇 2007. 4. 20 発行
- SGRA レポート37 第1回チャイナ・フォーラム in 北京講演録 「パネルディスカッション『若者の未来と日本語』」
池崎美代子、武田春仁、張 潤北、徐 向東、孫 建軍、朴 貞姫 2007. 6. 10 発行
- SGRA レポート38 第6回日韓フォーラム in 葉山講演録 「親日・反日・克日：多様化する韓国の対日観」
金 範洙、趙 寛子、玄 大松、小針 進、南 基正 2007. 8. 31 発行
- SGRA レポート39 第26回フォーラム講演録 「東アジアにおける日本思想史～私たちの出会いと将来～」
黒住 真、韓 東育、趙 寛子、林 少陽、孫 軍悦 2007. 11. 30 発行
- SGRA レポート40 第27回フォーラム講演録 「アジアにおける外来種問題～ひとの生活との関わりを考える～」
多紀保彦、加納光樹、プラチャヤー・ムシカシントーン、今西淳子 2008. 5. 30 発行
- SGRA レポート41 第28回フォーラム講演録 「いのちの尊厳と宗教の役割」
島蘭進、秋葉悦子、井上ウイマラ、大谷いづみ、ランジャナ・ムコパディヤヤー 2008. 3. 15 発行
- SGRA レポート42 第2回チャイナ・フォーラム in 北京&新疆講演録 「黄土高原緑化協力の15年—無理解と失敗から相互理解と信頼へ—」 高見邦雄 日本語版、中国語版 2008. 1. 30 発行
- SGRA レポート43 渥美奨学生の集い講演録 「鹿島守之助とパン・アジア主義」 平川均 2008. 3. 1 発行
- SGRA レポート44 第29回フォーラム講演録「広告と社会の複雑な関係」 関沢 英彦、徐 向東、オリガ・ホメンコ
2008. 6. 25 発行

- SGRA レポート45 第30回フォーラム講演録 「教育における『負け組』をどう考えるか～日本、中国、シンガポール～」佐藤香、山口真美、シム・チュン・キャット 2008. 9. 20発行
- SGRA レポート46 第31回フォーラム講演録 「水田から油田へ：日本のエネルギー供給、食糧安全と地域の活性化」東城清秀、田村啓二、外岡 豊 2009. 1. 10発行
- SGRA レポート47 第32回フォーラム講演録 「オリンピックと東アジアの平和繁栄」清水 諭、池田慎太郎、朴 榮濬、劉傑、南 基正 2008. 8. 8発行
- SGRA レポート48 第3回チャイナ・フォーラム in 延辺&北京講演録 「一燈やがて万燈となる如くーアジアの留学生と生活を共にした協会の50年」工藤正司 日本語版、中国語版 2009. 4. 15発行
- SGRA レポート49 第33回フォーラム講演録 「東アジアの経済統合が格差を縮めるか」東 茂樹、平川 均、ド・マン・ホーン、フェルディナンド・C・マキト 2009. 6. 30発行
- SGRA レポート50 第8回日韓アジア未来フォーラム講演録 「日韓の東アジア地域構想と中国観」平川 均、孫 洌、川島 真、金 湘培、李 鋼哲 日本語版、韓国語 Web 版 2009. 9. 25発行
- SGRA レポート51 第35回フォーラム講演録 「テレビゲームが子どもの成長に与える影響を考える」大多和直樹、佐々木 敏、渋谷明子、ユ・ティ・ルイン、江 蘇蘇 2009. 11. 15発行
- SGRA レポート52 第36回フォーラム講演録 「東アジアの市民社会と21世紀の課題」宮島 喬、都築 勉、高 熙卓、中西 徹、林 泉忠、ブ・ティ・ミン・チイ、劉 傑、孫 軍悦 2010. 3. 25発行
- SGRA レポート53 第4回チャイナ・フォーラム in 北京&上海講演録 「世界的課題に向けていま若者ができること～TABLE FOR TWO～」近藤正晃ジェームス 2010. 4. 30発行
- SGRA レポート54 第37回フォーラム講演録 「エリート教育は国に『希望』をもたらすか：東アジアのエリート高校教育の現状と課題」玄田有史 シム・チュンキャット 金 範洙 張 健 2010. 5. 10発行
- SGRA レポート55 第38回フォーラム講演録 「Better City, Better Life ～東アジアにおける都市・建築のエネルギー事情とライフスタイル～」木村建一、高 偉俊、Mochamad Donny Koerniawan、Max Maquito、Pham Van Quan、葉 文昌、Supreedee Rittironk、郭 榮珠、王 劍宏、福田展淳 2010. 12. 15発行
- SGRA レポート56 第5回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録 「中国の環境問題と日中間協力」第一部（北京）：「北京の水問題を中心に」高見邦雄、汪 敏、張 昌玉 第二部（フフホト）：「地下資源開発を中心に」高見邦雄、オンドロナ、ブレンサイン 2011. 5. 10発行
- SGRA レポート57 第39回フォーラム講演録 「ポスト社会主義時代における宗教の復興」井上まどか、ティムール・ダダバエフ、ゾンターク・ミラ、エリック・シッケタンツ、島 蘭 進、陳 継東 2011. 12. 30発行
- SGRA レポート58 投稿 「鹿島守之助とパン・アジア論への一試論」平川 均 2011. 2. 15発行
- SGRA レポート59 第10回日韓アジア未来フォーラム講演録「1300年前の東アジア地域交流」朴 亨國、金 尚泰、胡 潔、李 成制、陸 載和、清水重敦、林 慶澤 2012. 1. 10発行
- SGRA レポート60 第40回フォーラム講演録「東アジアの少子高齢化問題と福祉」田多英範、李 蓮花、羅 仁淑、平川 均、シム・チュンキャット、F・マキト 2011. 11. 30発行
- SGRA レポート61 第41回SGRAフォーラム講演録「東アジア共同体の現状と展望」恒川恵市、黒柳米司、朴 榮濬、劉 傑、林 泉忠、ブレンサイン、李 成日、南 基正、平川 均 2012. 6. 18発行
- SGRA レポート62 第6回チャイナ・フォーラム in 北京&フフホト講演録 「Sound Economy ～私がミナマタから学んだこと～」 柳田耕一 「内モンゴル草原の生態系：鉱山採掘がもたらしている生態系破壊と環境汚染問題」郭 偉 2012. 6. 15発行

- SGRA レポート64 第43回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「東アジア軍事同盟の課題と展望」
朴 榮濬、渡辺 剛、伊藤裕子、南 基正、林 泉忠、竹田いさみ 2012. 11. 20 発行
- SGRA レポート65 第44回SGRAフォーラム in 蓼科 講演録「21世紀型学力を育むフューチャースクールの戦略と課題」
赤堀侃司、影戸誠、曹圭福、シム・チュンキャット、石澤紀雄 2013. 2. 1 発行
- SGRA レポート66 渥美奨学生の集い講演録「日英戦後和解（1994-1998年）」（日本語・英語・中国語）沼田貞昭
2013. 10. 20 発行
- SGRA レポート67 第12回日韓アジア未来フォーラム講演録「アジア太平洋時代における東アジア新秩序の模索」
平川 均、加茂具樹、金 雄熙、木宮正史、李 元徳、金 敬黙 2014. 2. 25 発行
- SGRA レポート68 第7回SGRAチャイナ・フォーラム in 北京講演録「ボランティア・志願者論」
（日本語・中国語・英語）宮崎幸雄 2014. 5. 15 発行
- SGRA レポート69 第45回SGRAフォーラム講演録「紛争の海から平和の海へ—東アジア海洋秩序の現状と展望—」
村瀬信也、南 基正、李 成日、林 泉忠、福原裕二、朴 榮濬 2014. 10. 20 発行
- SGRA レポート70 第46回SGRAフォーラム講演録「インクルーシブ教育：子どもの多様なニーズにどう応えるか」
荒川 智、上原芳枝、ヴィラーク ヴィクトル、中村ノーマン、崔 佳英 2015. 4. 20 発行
- SGRA レポート71 第47回SGRAフォーラム講演録「科学技術とリスク社会—福島第一原発事故から考える科学技術
と倫理—」崔 勝媛、島蘭 進、平川秀幸 2015. 5. 25 発行
- SGRA レポート72 第8回チャイナ・フォーラム講演録「近代日本美術史と近代中国」
佐藤道信、木田拓也 2015. 10. 20 発行
- SGRA レポート73 第14回日韓アジア未来フォーラム、第48回SGRAフォーラム講演録「アジア経済のダイナミズム—
物流を中心に」李 鎮奎、金 雄熙、榊原英資、安 秉民、ドマン ホーン、李 鋼哲 2015. 11. 10 発行
- SGRA レポート74 第49回SGRAフォーラム講演録：円卓会議「日本研究の新しいパラダイムを求めて」
劉 傑、平野健一郎、南 基正 他15名 2016. 6. 20 発行
- SGRA レポート75 第50回SGRAフォーラム in 北九州講演録「青空、水、くらし—環境と女性と未来に向けて」
神崎智子、齊藤淳子、李 允淑、小林直子、田村慶子 2016. 6. 27 発行
- SGRA レポート76 第9回SGRAチャイナ・フォーラム in フフホト&北京講演録「日中200年—文化史からの再検討」
劉 建輝 2020. 6. 18 発行
- SGRA レポート77 第15回日韓アジア未来フォーラム講演録「これからの日韓の国際開発協力—共進化アーキテクチャ
の模索」孫赫相、深川由紀子、平川均、フェルディナンド・C・マキト 2016. 11. 10 発行
- SGRA レポート78 第51回SGRAフォーラム講演録「今、再び平和について—平和のための東アジア知識人連帯を考え
る—」南基正、木宮正史、朴榮濬、宋均營、林泉忠、都築勉 2017. 3. 27 発行
- SGRA レポート79 第52回SGRAフォーラム講演録「日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性(1)」
劉傑、趙珖、葛兆光、三谷博、八百啓介、橋本雄、松田麻美子、徐静波、鄭淳一、金キョンテ
2017. 6. 9 発行
- SGRA レポート80 第16回日韓アジア未来フォーラム講演録「日中韓の国際開発協力—新たなアジア型モデルの模索—」
金雄熙、李恩民、孫赫相、李鋼哲 2017. 5. 16 発行
- SGRA レポート81 第56回SGRAフォーラム講演録「人を幸せにするロボット—人とロボットの共生社会をめざして第
2回—」稲葉雅幸、李周浩、文景楠、瀬戸文美 2017. 11. 20 発行
- SGRA レポート82 第57回SGRAフォーラム講演録「第2回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性—蒙
古襲来と13世紀モンゴル帝国のグローバル化」葛兆光、四日市康博、チョグト、橋本雄、エルデニ
バートル、向正樹、孫衛国、金甫栴、李命美、ツェレンドルジ、趙阮、張佳 2018. 5. 10 発行
- SGRA レポート83 第58回SGRAフォーラム講演録「アジアを結ぶ？『一带一路』の地政学」朱建榮、李彦銘、朴榮
濬、古賀慶、朴准儀 2018. 11. 16 発行

- SGRA レポート84 第11回SGRA チャイナフォーラム講演録「東アジアからみた中国美術史学」塚本磨充、呉孟晋
2019. 5. 17 発行
- SGRA レポート85 第17回日韓アジア未来フォーラム講演録「北朝鮮開発協力：各アクターから現状と今後を聞く」
孫赫相、朱建栄、文晔鍊 2019. 11. 22 発行
- SGRA レポート86 第59回SGRA フォーラム講演録「第3回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：17
世紀東アジアの国際関係—戦乱から安定へ—」三谷博、劉傑、趙琰、崔永昌、鄭潔西、荒木和憲、
許泰玖、鈴木開、祁美琴、牧原成征、崔姪姫、趙軼峰 2019. 9. 20 発行
- SGRA レポート87 第61回SGRA フォーラム講演録「日本の高等教育のグローバル化!？」
沈雨香、吉田文、シン・ジョン Chol、関沢和泉、ムラット・チャクル、金範洙 2019. 3. 26 発行
- SGRA レポート88 第12回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「日中映画交流の可能性」
刈間文俊、王衆一 2020. 9. 25 発行
- SGRA レポート89 第62回SGRA フォーラム講演録「再生可能エネルギーが世界を変える時…? —不都合な真実を超えて」
ルウェリン・ヒューズ、ハンス＝ヨゼフ・フェル、朴准儀、高偉俊、葉文昌、佐藤健太、近藤恵
2019. 11. 1 発行
- SGRA レポート90 第63回SGRA フォーラム講演録「第4回 日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：『東
アジア』の誕生—19世紀における国際秩序の転換—」三谷博、大久保健晴、韓承勳、孫青、大川
真、南基玄、郭衛東、塩出浩之、韓成敏、秦方 2020. 11. 20 発行
- SGRA レポート91 第13回SGRA-V カフェ講演録「ポスト・コロナ時代の東アジア」林 泉忠 2020. 11. 20 発行
- SGRA レポート92 第13回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「国際日本学としてのアニメ研究」大塚英志、秦 剛、
古市雅子、陳 夔 2021. 6. 18 発行
- SGRA レポート93 第14回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「東西思想の接触圏としての日本近代美術史再考」稲賀
繁美、劉 曉峰、塚本磨充、王 中忱、林 少陽 2021. 6. 18 発行
- SGRA レポート94 第65回SGRA-V フォーラム講演録「第5回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性：19
世紀東アジアにおける感染症の流行と社会的対応」朴 漢珉、市川智生、余 新忠 2021. 10. 05 発行
- SGRA レポート95 第19回日韓アジア未来フォーラム講演録「岐路に立つ日韓関係：これからどうすればいいか」
小此木 政夫、李 元徳、沈 揆先、伊集院 敦、金 志英、小針 進、朴 榮濬、西野 純也
2021. 11. 17 発行
- SGRA レポート96 第66回SGRA フォーラム講演録「第6回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性
人の移動と境界・権力・民族」塩出浩之、趙 阮、張 佳、榎本 渉、韓 成敏、秦 方、大久保健晴
2022. 6. 9 発行
- SGRA レポート97 第67回SGRA フォーラム講演録「『誰一人取り残さない』如何にパンデミックを乗り越えSDGs実現
に向かうか—世界各地からの現状報告—」佐渡友 哲、フェルディナンド・C・マキト、杜 世鑫、
ダルウィッシュ ホサム、李 鋼哲、モハメド・オマル・アブディン 2022. 2. 10 発行
- SGRA レポート98 第15回SGRA チャイナ・フォーラム講演録「アジアはいかに作られ、モダンはいかなる変化を生ん
だのか?—空間アジアの形成と生活世界の近代・現代—」山室信一 2022. 6. 9 発行

■ レポートご希望の方は、SGRA 事務局 (Tel : 03-3943-7612 Email : sgra@aisf.or.jp) へご連絡ください。

SGRAレポート No. 0099

第68回SGRAフォーラム

夢・希望・嘘

—メディアとジェンダー・セクシュアリティの関係性を探る—

編集・発行 (公財) 渥美国際交流財団関口グローバル研究会 (SGRA)

〒112-0014 東京都文京区関口3-5-8

Tel: 03-3943-7612 Fax: 03-3943-1512

SGRA ホームページ: <http://www.aisf.or.jp/sgra/>

電子メール: sgra@aisf.or.jp

発行日 2022年11月1日

発行責任者 今西淳子

印刷 (株)平河工業社

©関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ねならびに引用の場合はご連絡ください。

©Sekiguchi Global Research Association Copying is Prohibited. For inquiries or quotes, please contact us.

SGRA REPORT

SGRAレポート

NO. **99**

第99回 SGRAフォーラム

夢・希望・嘘 — メディアとジェンダー・セクシユアリティの関係性を探る —

